

337
344



0054302000

2

0054302-000

特220-161

花嫁オンパレード

南竜一・著

二松堂

昭和6

AIC

Hishōjō
Chūshū *Kanba*

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

537

337
344

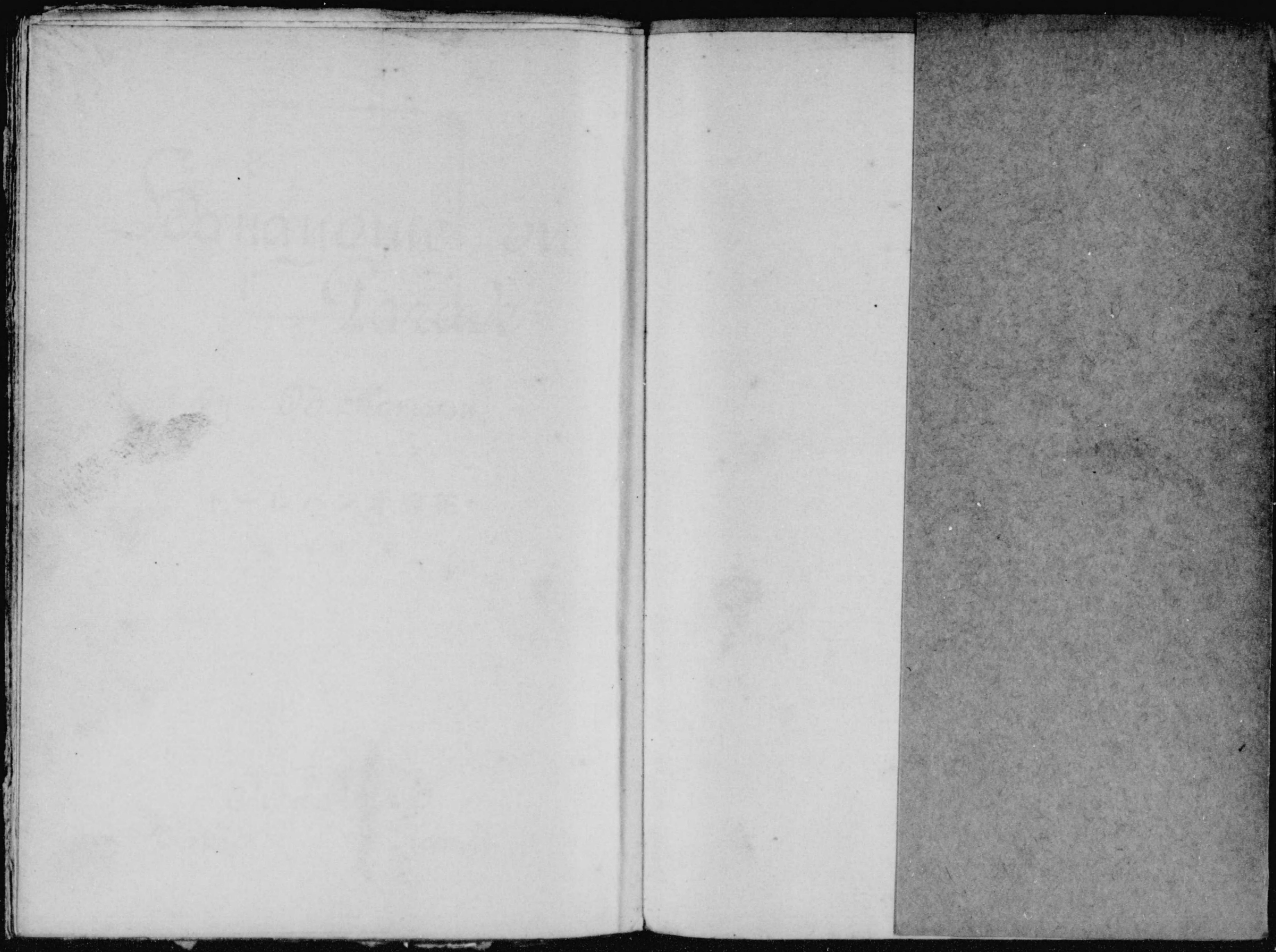
*Samayome on
Parade*

by O. Komatsu

ドーレパンオ嫁花

著 一 龍 南

Shishōjō
Tokio Kanda.



特220
161



*Sadanayome on
Larale*

by Ob. Komatsu

ドーレパンオ嫁花

著 一 龍 南



Obishōjō
Tokio Kanwa.

序

機械文明と資本主義文明の爛熟期に達著して、そのいづれにも疲れなやんだ世界の心臓は、今や天涯の孤島に、或は沙漠の隣りのジャングルに置き忘れられてゐた、蠻人の國へと惹きつけられてゐる。

文明の汚塵を浴びないで来た野生の姿こそ、一九三一年の疲れた文明人に、澄刺たる精氣と新鮮な刺戟とを與へる、唯一のものなのだ。

萎え疲れた大都市の埃の中に、たゞれたエロを求めグロを探してあきたらぬ人々よ！
來つてこの清純なる、フレツシユなる、露骨にして弾力ある、裸體の國々のエロを見よ、グロを見よ。

このエロこそ、このグロこそ、われ等を頽廢の墓に導くアヘンの怡樂とは反對な、生きる歡びとヴァイタリテイとを、諸君に提供するであらう。

昭和六年初夏

編者

花嫁オン・パレード目次

エロ・グロ結婚風俗さまざま……………(一)

處變れば品變る―月賦結婚―生めよ、殖やせよ―嫁と羊の取換へツこ―まさかの時には懐剣で―お互に姉妹を交換―名無しの權兵衛―エロの奉仕―花婿の足の裏―八歳でお嫁に―小さい時から許嫁

ポルネオのエロゲーム……………(二六)

燃ゆる想ひをタバコに詰めて―濃厚極まるラヴ・シーン―土人の御幣かつぎ―花婿の出陣―花嫁花婿の鬼ごっこ

シヤムのグロ風俗……………(三五)

前を隠して尻は丸出し―春日麗かに巡禮の群―地に酒を撒いて―悪魔拂ひ

ピルマの花嫁……………(四五)

安産のまじなひ―搖籃まつり―命名式―處女成人の式―處女の張り店―垣間見る處女の素肌―看板娘を蕩らすには―青年團の娘狩り―娘と若者は一室で―惠まれたビルマ娘―公然と第二號を―結婚初夜のいたづら―花婿を盗む―獨身クラブ―駈落の合圖

オーストラリア土人……………(七四)

氏素性を明かに―男はみんな「お父さん」―厄介な嫁選び

グロ民族アングダマン人……………(八〇)

南海の原始人―子供のやうな大人―首、蛇に怖ぢず―怖い風之神―妻の骸骨を首にかけ―グロ民族のグロ結婚

南洋土人のエロ生活……………(九〇)

女も男も素裸で―エロ裝飾・娘の入墨―奇天烈な男のお産―産婦の介抱は―武運を祈る―男子近寄る可らず―初孫見参―女軍進撃―亭主受難時代―フタ兒の

仕末は―誰に見しよとて柔肌にお譲り結婚、父娘結婚―効力テキメン惚れ薬―誘惑袋―奥入れ前の身だしなみ―土人にも處榮―掠奪結婚―じれツたい照れ隠し―花嫁はニンマリと―いやがる花嫁をむりやりに―豚を殺して―盛んな婿入り―グロな饗應―人間の井鉢―結婚式の泣き女―姦通の制裁

マーシヤル・カロリン……………(一三五)

椰子の梢が危ない―姉妹はみな女房

マライ半島の花嫁……………(一三八)

大名行列―結婚テスト―染め上げ花嫁―一日だけの王様女王―七色の虹糸をバラリと

印度支那の結婚奇風……………(一四七)

媒酌結婚―カムボヂヤの結婚―紅い絹糸の守護神―ラオスの戀愛市場

セイロン奇習……………(一五四)

ヴェダの切髪り―「婿殿御入り候へ」―花嫁の禮儀

印度の熱情

(一六〇)

殺伐な婚選び―廻り口説き―試験的同棲―一妻多夫―食べ合ひ、種蒔き―不貞の女は？

..... 4

目次終

花嫁オン・パレード

エロ・グロ結婚風俗さまざま

處變れば品變る

ところ變れば品變る、十人十色、人さまざま國さまざま、國が違へば人種が違ふ、人種が違へば風俗もまた違ふといふもの。

おなじ文明國でも、東洋と西洋とはまるで反對のことが多い。ソレ、手近いところでは、われ／＼の「おいで／＼」の合圖が、掌を向ふへ向けて下へと向ふへあふぐのを、毛唐はアベコベに、掌をこちらへ向けて、上からこちらへあふぐではないか。

同じトンカツを食ふにしながら、西洋人は向ふの端から、右の端から向ふへ切つてパクリとやる。われ／＼は手前から、左の端をおさへて切つて、手前からとつて食ふ方が勝

手だ。

スープを吸ふのも同じこと、匙を向ふへ押しこちらへ嘍るのが本式だが、僕たちはツイこつちへしやくつてやりたくなる。早い話がこちとらでは「女房なんぞ味噌でも甜めてろい！ いやサ、女なんぞは」と、野郎がダンゼン威張るのだが、向ふぢやア、チンで、女に頭があらないではないか。

をかしくつて見ておられないザマだが、そこはソレ「お國風」だ。あちらの身になつてみれば、こちとらのやつてゐることが、同じやうにまた可笑しいのだ。笑ふことはない。郷に入つては郷に従へ！

たとへば、世界の大きさに比べて。これほど小さい日本の國內でも、奥州の奥の風俗と、九州のはての風俗とでは、實によつたまげるほど違つたものがある。だから、ましていはんや、北海の孤島に棲む島の土人と、南のはての野蠻國の民族との間には、その風俗習慣に雲泥の差があるのは已むを得ないわけさ。

わたしが今こゝで、世界各國の土人をひつぱり出して、かれ等の風俗を御紹介しようと

いふ所以のものは、われ／＼の中にひそみ隠れてゐるこの四〇パーセントのエロ的好奇心と、六〇パーセントの學的興味を満足させんがためなのである。
そこで——閑話休題、いよ／＼本筋に入る。

月賦結婚

西洋と東洋の、丁度つなぎ目にあたるところ、トルコ、ベルシヤ、それからあの廣い沙漠にまつ赤な陽の落ちるアラビヤ、これ等の國々はアジアのいちばん西にあるので、便宜上、西アジアとよばれてゐる。この地方の住民から、先づゆかう。

アラビヤ人にもいろいろあるが、中にも純粹のアラビヤ系といはれる人種は、ベドウィン人である。このベドウィン人は、年頃の娘をすこぶる大切にす。といふのはこの人種の間では、妙齡の娘は立派な財産なのである。かりに三人の娘があるとすると、その娘の年頃や出來のよし悪しにもよるが、先づ四百乃至千圓の品物をもつてゐるやうなもので、年頃の娘さへあれば、どんな素寒貧親爺にでも、商人はどんな品物も貸し賣りする。親爺

の世間的地位も亦悪くないのである。

さて、かういふ社會であるから、結婚の第一要件は結納金である。この結納金が、結婚にも離婚にも唯一の基礎になるのだ。ペドウィン人は一般に、若い男が獨身であるのは罪悪だと考へてゐる。しかし金のないもの、結納金の調達のできない者は、何としても結婚するわけにはまらぬ。そこでさういふ貧乏人は窮餘の一策で、ちやうどモボが新型の洋服を作るやうなぐあひに、『結納の月賦拂込み』といふ奇抜なことをやる。

たとへば、こゝに一人の貧乏な青年があつて、知合ひの幼女を將來自分の妻に貰ひうけたいといふことになり、娘の両親がこれを承知する。と、青年はそれから、娘の父親に對して結納金の月掛を拂ひ込むのだ。そして首尾よく娘が十五歳になり、月賦を滞りなくすませば、目出度く結婚式といふことになる。但しかういふ場合に、許婚の月賦青年の惧れるのは義父の死である。この月賦期間中に、もし娘の父が死ぬと、今までの月賦は無効になり、また初めから、今度は娘の兄に當る者に對して、拂込みを直さなくちやならないからだ。世智がらゐるのは世界的の流行だと見える。

さてこんな苦心をして、いよく結婚式といふ段取りになりその日が来る。當日は花嫁花婿、双方お互ひに両親に伴はれて式場に臨む。この席には新郎新婦の親類、友達と代書人、時にはピラといふ法學者も列席する。用意が出来ると、双方に何の關係ももたない立合人の前で、まづ双方の父親が握手を交す。すると、双方の親類縁者が、改めて、『この結婚に不服はないか』といふことを確める。両親が『幾千代かけて！』と、それを確認すると、花婿が前に出る。そして葡萄酒のグラスを舉げて、『われ／＼二人を結ばしめられた神に感謝する』と宣誓して盃を乾し、これを花嫁に與へる。この盃事が済むと、用意の土盃またはグラスが一つ持出される。誰かがそれをとつて、愕然と地上に投げつける。

『お目出たうー！』『幸福に！』列席の者がいつせいに叫ぶ。

盃を割るのは、かうして成立した夫婦關係が、盃が粉々になつて再びその破片が割れないやうに、離れないであれ、といふ御幣をかつぐのだ。これは日本の古いしきたりにもある。親分子分の誓や、義兄弟の盃を交した後、よくやつたものである。

割つた盃は、なるべく細かく微塵になる方がよい。細かく割れれば割れる程、新夫婦の

幸福が大きく、一家が繁昌する。双方の両親はこの破片を拾つて、その中の二つだけを新郎と新婦に與へる。

新郎新婦は、この破片を一生大切に持つてゐる。ユダヤ人の中には、この破片を夫婦の中どちらかが死ぬまでもつてゐて、一方が死ぬと、残つた方が死んだ配偶者の、永遠にぶつた臉の上に載せて、葬つてやる者もある。

この式がすむと贈物の交換がある。披露の宴會がある。そして式後八日間は、魔がさすといふので、新郎も新婦も、一步も家を出ないことになつてゐる。これは迷信といへば迷信であらうが、なか／＼うまいことを考へたものだと思ふ。神聖な結婚生活の初期に、形のある魔物に魅せられたり、魅したりしないものでもないから。

生めよ、殖やせよ

ユダヤ人の結婚式は、多く一家の大廣間で行はれる。

その朝花婿は、おほぜいの友人たちに護られて町の教會に行く。そこで、彼は牧師から

創世記の第一頁を読みかされる。午後または夕方になると、花嫁花婿は、その両親、親類縁者、お客と共に廣間に集まる。花嫁花婿が揃つて並ぶと、集つた者達は一せいに聲をそろへて、「産めよ、殖やせよ、仲睦じく」といつて、てんでに擱んできた麥粒を、バツバツと二人に投げつける。それがすむと、みんなは四本の棒でさゝへた美しい飾りをした天蓋の下に、花婿を立たせる。それから花嫁は、その花婿のまはりを三度まはらされる。廻りをはつたところで、花婿は花嫁の手をとり、二人で天蓋のまはりを廻る。その間ちう集つた者たちは、「産めよ、殖やせよ！」を繰返してゐるのだ。

やがて、司會者が二人の手をとり、固く固く握り交させ、二人の頭からヴェールをかけてやる。そして葡萄酒の盃をとつて、祝福の祈禱をとらへ、自分の飲んだ残りを新郎新婦に飲ませる。それがすむと、新郎は新婦の方へ向きなほり、司會の法學者に結婚指環を渡す。法學者は一應これを改めた後、新郎の手に返す。新郎はそれを受取り、そこで初めて新婦の食指に嵌めてやる。そしてかう言ふ。

「モーゼとイスラエルとの法に従ひ、この指環を通じてあなたと私とは結婚したのであ

る。「やがて結婚の宣誓書が、そこで讀上げられる。ぶだう酒を飲み、盃を破ること前の場合に同じ。この日は、かねて音楽團が雇ひこまれてゐて、夜は音楽と、ダンスで明かされる。結婚指環には多く、「幸運」と、ヘブライ語で彫りつけられる。

どこの國でも、葬式や結婚式などは、その信仰する宗教の方式に従ふものである。

西アジアのモスLEM教の農夫の結婚は、前述ベドウィンの結婚と同じく殆んど賣買結婚である。金のない青年は、なか／＼妻をめぐることが出来ない。そこで、前記の月掛式結婚や、或ひは妹のあるものは、友達の妹と交換して、やつと結婚を行ふやうなことをする。さういふ場合、式は合同で、同じ日、同じ場所で、同時に二組の華燭の典を擧げる。交換結婚とでも名附くべきものである。娘達は、いつか一度は嫁ぐべき日の來ることを豫め覺悟してゐて、いつでもまごつかないやうに、ふだんからその日の晴着を作つて置く。その結婚日に至つては不定で、時や年齢の問題ではなく、すべて財産次第といふことになる。娘の親は、結婚の申込者に對してはなか／＼貪慾で、なるたけ高く賣りつけようとして、安い結納金では、うんと言はない。だが、それもどうか話が纏まつて、いよく結婚式

といふことになる。その一週間前から賑やかな前祝ひの祭がはじまるのである。來る夜も來る夜も、新郎新婦の友人達や親類達が、家の廣庭に集まつてダンスをする。そのダンスは、一種特別の「熊踊り」といふやつである。

嫁と羊の取換へつゝ

「熊踊り」といふのは、まづ一人の男が熊の装ひをして、女ばかりの半圓の眞中に立つ。この熊男は、咽喉をごろ／＼いはせて、たえず熊のうなるやうな聲で咆えたてながら、女の環を破つてつき抜けようとする。女達はそのたびに手を拍ち鳴し喚き立てて、それを防ぎながら、そろ／＼村はづれまで進んでゆく。そしてトド、熊を村はづれまで囲みながら連れていつて、村の外に逐ひ出す。つまり花嫁の娘を熊にとられないやうにして、首尾よく熊を、村外に逐ひ出すといふ仕組なのである。このダンスの行はれる間、ダンスの一團には、たえず村の音楽團が随行伴奏して、太鼓をたたき、騒々しく歌を唄つて、囃して行く。それが村の婦人連の花嫁に捧げるダンス。と、一方では男達が、花嫁花婿にささける

「剣をどり」といふのをやる。てんでんに剣をふり廻して、滑稽味たつぷりな手ぶり足ぶりで踊り廻るので、これも花嫁花婿を害する悪魔を追ひ散らすといふ、悪魔拂ひのダンスなのである。

かうして、一週間はすぎいよく當日になると、花婿はできるだけ大勢の客を招く。或るはでな結婚式では、その日一日の馳走に使ふため、百六十二頭の羊を屠つたといふ例さへある。その日は朝早く、村の若者達は、大勢で花嫁の家に押しかける。そして、花嫁を飾り立てた駱駝または馬に乗せて、音楽隊をつけて、ぞろ／＼練りまはすのである。村の丘をぐるりと取りまいて、この花嫁の騎馬行列は華々しく練り廻はされ、最後に花嫁は花婿の家に送りこまれる。花嫁はこゝで、その日一日を親類の者や村の女達と一緒に暮し、花婿を待つ。行列が丘を練りまはる時、ボン／＼と祝砲が放たれ、村中の者は歡聲をあげて囀り立てる。

一方花婿は、別の式場に大勢の客を招き、そこでみんなして、盛んに男性的な遊技をする。夕方になると、かねて用意の山海の珍味を並べて食堂を開く。花婿は一段高いところ

に坐り、すべてこの宴會の采配をふる。來會者はたらふく食ひ、たらふく飲む。この宴會がすむと、贈物の披露がある。これがなかなか慾ばつてゐて、策略的で面白い。即ち贈物はすべて現金であるが、世話役は、贈られた人の名前を読み上げる時に、その金額をわざと實際の金額より多く読み上げる。そこで他の連中も釣り合ひ上、よけいに金を包むといふわけになるのである。贈金の披露がすむと、花婿は立上つて、花嫁の待ち疲れてゐる我が家へと歩いてゆく。太鼓はむやみと鳴らされ、ボン／＼と花火が打ちあげられる。もう暗い家の前には、着飾つて雲のやうに群がった村の男女が、てんでにカンテラの灯をかざしながら、花婿を家の中に迎へ入れるのである。

まさかの時には懐想で

ドリース族といへば、シリヤの勇敢な民として知られてゐる民族だが、この民族の結婚風俗は、頗るきちんとした、またロマンティックなものである。

この民族は一夫一婦で、かつ婚姻は同族間にかぎられてゐる。たいてい、男は十八、女

は十四で結婚する。この民族の結婚式で面白いのは、式前に行はれる婿入りの式である。

いよく結婚ときまつた式日の三日前の日、花婿はよろひかぶとに身をかため、つまり凛々しい武装をして、自分と同年輩の青年あまたを打ち従へ、意気颯爽と馬に乗つて許嫁の家へ繰り込んで行く。許嫁の家では、許嫁の父親が、これもすつかり武装をして、玄關に待つてゐる。花婿はここで改めて形式的に、「なにとぞ御身の娘御を、拙者の妻として貰ひ受けたいものである」と申出る。許嫁の父親はこれに對して、「たしかに娘を進ぜよう」とかなんとか、最後の回答を與へる。結納金のことは、花嫁側でとりきめて婿の方へ要求する。そこで話がきまると、親類の女たち、また彼女の潔白を保證する母親たちが附きそつて、ヴェールで顔をかくした許嫁が現はれる。若者はそこで、娘に向つて直接に、「あなたも私の申出でを聞入れてくれますか？」と、念を押す。「え、たしかにお受けいたしましたわ」と、娘はかういつて、かねて用意してある美しいシリヤ風の懐劍を若者に捧げる。懐劍はクファイエといふ毛織の大ハンカチのやうな布で包まれてゐる。それは彼女が、手づから想ひをこめて作つて置いた代物である。この懐劍は、封建時代のわが國の武士の娘

のそれと同じく、かの女の運命を握るものともいへる。或る時は守り刀となり、こと次第によれば、花嫁が我れとわが胸に突きあてるやうなことになるやも知れぬもので、一生夫の肌守符となるのだ。

この懐劍の授受が済むと、はじめて男がつれて來た若者たちは、みんな許嫁の家の中に入る。娘はその侍女たちと湯殿に入つて、そこで一日を暮す。花婿の一行は、やがて引揚げる。年寄たちは娘の家に集まつて、煙草を吸つたり、コーヒーを御馳走になつたりしてゐる。

結婚式の當夜、花婿は數人の女たちによつて、お先きに、花嫁の待つてゐる寢室へと導かれる。花嫁は、金色さんらんと繡ひとりされた真紅のヴェールを、頭から足の先きまですつほりと被つてゐる。やがて花婿が入つてくると、花嫁はその真紅のヴェールをスリと取りのける。その瞬間に、案内の女たちはスイと部屋を出てしまふ。隣りの部屋に控へてゐる音楽隊が、妙なる音楽を奏しはじめる。花婿はそこで、かねて用意して置いたタンツールを、花嫁の頭上に載せる。このタンツールは、花嫁が生涯記念にとつて置くものな

のである。これで目出たく借老の契りができる。隣室の音楽隊は、ほとんど夜をこめて、榮ある新郎新婦のために樂を奏しつづける。他の部屋、或ひは戶外につめかけてゐる男たちは、さかんに劍の舞踏をやつてふざけ騒ぎ、悪魔の新郎新婦の寢室に近附くことを防ぐ。ドルース人はいづれも、妻に對して夫は絶対の権力があり、勝手氣儘に離別することができる。もし妻にして不貞のふるまひがあれば、直ちに婚禮の見合ひに贈られた懐劍を添へて、父の家に返すのである。すると妻の父は、その懐劍をもつて不貞な娘を、一家の恥辱をそそぐと稱して、その懐劍で成敗する。かういふところは、わが國の武士道とまことによく似てゐる。

花婿が花嫁に贈る冠タンツールは、普通は銀製であるが、貧乏な者は特に鉛でも作る。これは結婚式の時だけで、ふだんは冠らないのが普通である。大きさは一寸五分から、最大三寸位の直径のもので、これを絹糸で、花嫁の頭のでつべんに縛りつけるのである。

お互に姉妹を交換

フィリップピン群島から大洋州の島々にかけて、到るところに土着するネグリト民族は、體長四尺五寸の矮人種である。この未開人種はまた特殊の原始的な結婚風俗をもつてゐる。この人種でもまた、年頃の娘はその両親にとつて一種の財産であることは、前述のアラビヤの土人と同じである。美しい容貌と、よき健康をもつた娘は、富裕な青年の手によつて高價にあがなはれる。

婚約は大抵の場合、いや殆んど全部といつてよいだらう、本人同志でなく、双方の両親の間で話が進められる。婚約の話が進められるといふよりは、むしろ取引が行はれるといつた方が適當であらう。で原則としてこの人種の結婚取引には、當の本人同志は直接話に預からないのが普通だが、中には稀れに娘の選擇にまかせることもある。

元來が取引の結婚であるから、ここでも姉妹の交換が行はれる。即ちここに、各々一人の妹をもつた青年があつて、どちらも似合ひの年頃である時、その二人の両親が談合の上で、お互にその妹を兄の妻君としてまづ交換をする。さすれば、お互に莫大な結婚費を使はずにすむから、一舉兩得といふわけで手を拍つのである。

さてこの取引商議によつて、結婚がとり結ばれるのであるが、この人種にはただ結婚祝ひの祝宴があるだけで、特に窮屈な儀式といふものはない。祝宴にはダンスが付き物である。ある地方では、親族知己の大圓陣の中に男女が坐を占め、お互に一つの皿から物を取つて、食べさせ合ふのである。また見物人の喝采に迎へられて、新夫婦が衆人環視のまん中で、結婚したといふしるしの或る行爲を、いとも濃やかにとり行ふこともある。

式が終つた後の数日間、新夫婦は前の両親の許に日を送り、それから自分達の家庭に落ちつくのである。すると、ここに初めて、親類知己からの贈物が届けられ、またく〜ダンスとお祭騒ぎが続けられる。なほこの人種には、離婚は滅多に行はれない。

名無しの權兵衛

同じフィリッピンのルソン島に住む、イグロットといふ土人は道德觀念がなかく〜高く、未婚の少女はいづれも特設の宿舍に泊まらせる。青年もまた、家族とは別の寢所に宿泊する。かういふ兩性を隔離する制度は、一般公衆の意見として、羨ましいまでによく實行さ

れてゐる。

青年男女が結婚するには、ぜひ両親の同意を要する。そして婚約が成立すると、實際に式を擧げる前に、結婚生活の試運転をやる。これがこの人種の、珍らしい特殊の習慣である。またこの人種は、双生児を非常に不吉のものと考へてゐる。しかしそのうちの一人を隣人に貰つてもらへば、その子供たちの災難は免れることになつてゐる。

これも同じくフィリッピンの、ミンダナオ島に住むスパナン族の少年少女は、生後数年間は跣足で通す。これはこの期間に、子供達をとり巻く悪魔拂ひをするためださうである。そしてまた面白いことには、これ等の子供達は、四乃至五歳になるまでは名前をつけない。家族は一つ小屋に寢起する。子供達のために特に作られた宿舍などはない。

この民族の男女も、多くはその結婚は両親まかせであるが、大仕掛なダンスが盛んなので、男も女も、その機會にお互の相手を選んだり、きめたりする機會がある。

式には、牧師や僧侶のやうな者は立會はないが、双方の父母に對する禮儀はかなり厚く、その父母に對しては、夫妻共に名前を呼びすてにするやうなことはない。結婚式の行事で

面白いのは、新郎新婦が夫婦の象徴的行動として、一つの皿に盛つた食物を、お互に食はせ合ふことである。

一夫多妻は、この民族では公然と許されることであるが、生活のゆたかな者でなければ養へぬから、これは要するに富裕な者のみの有する特権といふことになる。一體この民族は、男も女も、その容貌や外見が全くちがつた點がない。従つて女性特有の繊細さや、性的魅力などは男には感じられない。そこで、彼等が妻をめとるのは、ただ子孫を作ることと、生活の相捧を求めるといふ位の意味しかない。

エロの奉仕

やはりミンダナオに住む住民バゴボ民族は、フィリッピン民族の中では、結婚制度のいちばん遅くできた人種である。この民族の結婚年齢は、多く二十歳以上である。婚約は、やはり両親の勤めによるのである。娘の親は、婿方から来た結納の半額だけ、返禮として返すことになつてゐるので、この點我が日本などと同じく、結婚は花嫁の賣買取引といふ

ことにはならない。婚約が成立してからすぐに式を挙げず一年位してやるのも、わが國の風に似てゐる。ただ變つてゐるのは、その間、花嫁は嫁の實家のために働くことである。

三々九度の盃事は、やはり一つの皿に盛つた飯を食ひ合ふのである。但しこの人種の結婚式では、坊主が一人立合つて、二人が箸を取る前に一口、神様に供へる。式が済むと、二人は新しい彼等の家庭に入るのであるが、新夫はその後の何年かを、嫁の實家のために働いてやるといふ義務をもつてゐる。つまりある短かい期間だけ、養子に行つたやうな奉仕をするのである。不貞な妻は殺す習慣がある。

花婿の足の裏

ジャヴァの土人は早婚である。男は大體十六歳、女は十二から十四歳の間にたいして結婚してしまふ。相手の選擇は無論、両親がする。當人同志の好き嫌ひなどは、てんで問題にされず、親の勝手にきめられる。双方の両親は、對談で話をとりきめると、まづ娘の親の方から息子の親に結納の貢をする。婿の方では、其後から相當の代金を拂ふのである。

それは銀、寶石、材木、食物などです。其他一般親族や、友人達を招き集めて、結納披露、即ち日本でいふ樽開きといったやうな祝宴をやる。

結婚の當夜は、新郎新婦ともに徹夜をしなければならない。この晩に眠ると、きつと何かたたりがあるといはれてゐる。そして次の日はお寺で、マホメット教の法式に従つて儀式を行ふのである。その日花婿は、祝祭日の衣裳を着て顔には化粧を施し、親族友人達を残らず後に従へ、音楽の音につれて行進する。花嫁は家に留まつて、その名代をお寺に送ることになつてゐる。すると花婿は、お寺から別の華美な衣裳に着かへて、花嫁の家に向つて行く。花嫁はそれこそ、一世一代の美々しい装ひと化粧をこらし、その上半身と腕をあらはにし、それに罌粟油と藍香を塗つて待つてゐる。

この人種の習慣では、結婚の儀式として、わが國で三々九度の盃事をしたり、またミンダナオ土人が一つ皿から米飯を食べたりする代りに、花嫁が花婿の足を洗ふことになつてゐる。これは妻が夫に絶対服従をするといふことをあらはす行爲で、まことに奥床しい。この洗足の儀式がすむと、花嫁は物々しい護衛に守られて、いよく／＼新らしいわが家、即

ち夫の家に繰り込んで行く。そして、そこで盛大な祝宴が張られる。次の日はまた／＼、今度は新婦の生家で饗宴が催される。第三日は新郎新婦二人ともかれ等の家に落着いて、いよく／＼新しい家庭の支度にとりかゝることが許される。もしこの時、二人が貧しすぎて一家を持ち得ないやうな時には、彼等が新家庭を作り得るやうになるまで、妻の両親の家に寄寓することになつてゐる。また特別に、子供たちがごく幼少な時から、あれとこれとを添はせて、その家の血統を絶やさないやうにしたいといふやうな場合もあつて、こんな時には婚方の親の方で、小さい時から娘を貰ひ受け、つまり養女として、一つ家で育て上げる。そして年頃になつた時に、改めて式を舉げて正式に娶合はせることもする。

なほジャヴァでは、男にとつて大變具合のいゝことがある。といふのは、この人種が一般に信仰してゐるイスラム教では、男に離婚の自由を許してゐる。これによつて、夫は自由に、氣に入らない女房を離婚することが出来る。但しこの場合、夫は一定の金額を去らしめる女房に與へる義務がある。もう一つ、妻に死なれた夫は妻の死後三箇月と十日たてば、他の女と結婚することが出来るといふやうな、細かい規則までも出来てゐる。

八歳でお嫁に

スマトラのアキン族では、子供の誕生に日本に似たやうな儀式を行つてゐる。丁度日本の五箇月のいはた帯の式のやうに、こゝでは妊娠四箇月目、または六箇月目になると、夫の母が儀式として、嫁のお見舞に來る。そして何か手土産を持つて來て、歸りには若干のタバコと、その他の土産物を持つて歸る。また一般の知己も、この月に贈物をもつて見舞に來る。そして新らしい母、即ち妊婦は、いろ／＼と悪魔よけのまじなひをされる。いろ／＼産氣づくくと、妊婦はまづお湯をつかひ、香料を用ひること日本の通り。ただ違ふのは、その産褥に四十日の間燈明をたやさないことである。

乳兒のゆりかごには、必ずお護符をつけて置く。そして、生れてから丁度七日目、即ち日本でいへばお七日夜の祭りとして、この日に赤ん坊の頭髮を剃り、親類縁者を招んで祝宴を張り、回々教のしきたりである供儀の祭をして、赤ん坊の命名をするのである。これ等もわが日本の、誕生祝ひとよく似てゐる。

さて、彼等の結婚風俗であるが、この人種も亦非常に早婚である。女子はたいてい八歳から十歳の間に、男子は十六歳になると、それ／＼結婚してしまふ。婚約が双方の間に成り立つと、まづ婿の方から、嫁の方に贈物をする。この贈物は、妻たるべきものがその夫と結婚生活をつづけてゐる限り、記念品として残される品物である。結婚後の妻の境遇は、決して楽しいものでない。夫が極端に横暴に振舞ふことを許されてゐるからである。

小さい時から許嫁

南洋スタンの住民カバブ人種の男女は、幼年時代すでに婚約をしておくことがはやる。そして一定の時期が來ると、正式に結婚式を擧げるのである。この結婚式には、フェキといつて多少字の讀める聖職の者が、立合人になる。たいていの場合、男の方の父親が嫁取りをする息子をつれて、娶るべき許嫁の家に出かけて行く。そして、フェキが最後に、契約を結び、そのとりきめをする。この人種の嫁とりも、無論金で買ふのである。そこで、双方の父親の間に、結婚についての手筈が何から何まで取りきめられる。しかし父親達は、

結納金にはまるで手をつけない。結納金は婿方の母親から嫁方の母親に渡されるのである。父親がこれに手をふれるのは恥辱としてゐる。婿の方が事實物持ちならば、結婚に際して、牝の駱駝を二頭乃至三頭、嫁たるべき者の家に贈るのが普通である。その駱駝は、それぞれみんな後脚の臑が切り取られてあつて、動くことができない。そしてこれは花嫁の家の者の手によつて殺され、嫁と嫁の母と、婿の母の食膳に載せられ、残りは結婚の祝宴のさかなにされる。

さて、結婚日がきまると、花嫁方の者の手で、村内に一のテント小舎が建てられる。婿たるべき者は、式前の六日間を、この中で暮らさねばならない。その間の食物は、すべて三度々々嫁の母が運ぶ。いよく七日目の當日になると、同じ場所にもう一つのテントが張られ、この中に花嫁が送られる。このテントを中心に、村の男女の賑やかな音楽とダンスが始まる。すると花婿は、買へるだけ高價な馬に乗り、嫁のテントに近づく。一方婿の父は、婿への引出物を従へてやつて来る。その引出物といふのは、貧しい者は十乃至十五頭の羊、富裕者は五十から百頭の駱駝である。父がこの引出物を花嫁に贈ると、花婿は馬

を下り、劍をささげ、一少年を従へて花嫁のテントに入るのである。花嫁はそこで、テントの中から連出され、附添ひの侍女と共に三度テントのまはりを引廻はされ、再びテントの中に入る。そこでやゝしばらく、四人はテントの中に相對してゐる。しかしこの間、花婿と花嫁は言葉を交はさない。これが終ると、花嫁は附添ひの侍女と一緒に母の家にと歸つて行く。花婿だけは小舎の中に残つて、それからまた七日間この小舎で暮す。食事は例の如く、近所の嫁の母親の手で運ばれる。その間に花嫁の家族の方で、その側に今度は永久的の小舎を建築する。一方花婿の方では、一匹の動物を用意して、それを門前で殺し、その新らしく出来上つた小舎の中に入つて待つてゐる。七日が過ぎると、花嫁は化粧と盛装をこらし、女共をひき具して、花婿の小舎に送り込まれる。花嫁が夫の小舎の闕をまたぐと、花婿は彼の女のヴェールを脱がせる。花嫁はそれを元のやうにかぶる。婿はまたのける。またかぶる。かくすること三度の後花婿はおもむろに花嫁のトローベに手をさし入れる。それから花嫁の帯を解いて、かねて小舎の前に突き立てゝある木の枝にそれをかける。と外に集つてゐる群集が萬歳をさけぶ。附添ひの者が去る。かうして新郎新婦は、新婚の

初夜をはじめて差向ひで過すのである。彼等はそれから、一箇月乃至二箇月間このテントで暮し、やがて夫の両親の家に引移る。夫の父母は、別に新しく家を建てて、そこへ引越して彼等を待つてゐるのである。

ボルネオのエロ・ゲーム

燃ゆる想ひをタバコに詰めて

ボルネオのカヤンまたはケニヤといふ部落の土人は、若い男と若い女が晝間のびあふ機会がごくすくないので、男は多く夜間女がその両親と離れて寝てゐるところ、もしくは両親と同じ部屋に寝てゐるところへ忍んでゆく。カラビット土人の間では、戀愛の最初のしかけは女の方からするが、それを除いてはボルネオではいづれも、戀は男の方からしかけるのが普通になつてゐる。

ある男がある少女に惚れたとする。と、男はまづ根氣よく女のもとに通ひつめるのである

るが、かういふ時にその若者は、自分のかよふことを仲間の連中には、煙草をさがしに行くのだと稱する。これは、ボルネオでは人が訪ねてくると、その家の女達が、巻煙草をすすめてもてなす習慣があるところから來たものらしい。

ダヤク族の若者はまづ娘の家に訪ねて行くと、蒟醬をシリといふ草の葉にていねいに包んで、贈り物にする。さうしてもしも娘がそれを受取つたならば、娘はその若者に留つて話して行くことを許す合圖になるので、若者たるもの大いに意を強うすべきである。この訪問の時に、若者は時として非常に香氣の高い、一種の果實の種子を綴合せた首飾を、女の枕の下にそつと置いてくることがある。もしもその際娘が男を氣に入れば、後になつてその贈り物のことを男に話すのである。

カヤンあるひはケニヤ村では、迎客の禮として、一般にバナナの乾葉で包んだ巻煙草を出す風習があるが、ある娘がある男に特別な好意をもつてゐて、それを相手に通じさせる場合には、その巻煙草の巻き方に一種特別の技巧を用ゐる。さうされた場合、男はその娘が自分に對して、いつまでも長く尻を落着けて話して行つてくれよと、合圖してゐるもの

と考へてよろしい。そしてかれは、その後もしげくと通つて、大いに駒をすすむべきである。

濃厚極まるラヴ・シーン

かくて萬事がすらすらと運ぶと、娘は男にそのふくよかな太股を貸して、情緒でんめんたる膝枕をさせ、眞鍮の毛抜でもつて、男の鼻毛ならぬ眉毛だの睫毛だのを、ちくりちくりと抜いてくれるのである。まさにこれ男にとつては戀の勝者の陶醉境、人生の大濡場といふところである。

面白いのはかういふ戀の美酒に酔ふ土人娘のやきもちで、愛する男の眉毛なり、睫毛なりが少いときは大騒ぎ、これこそ「そなたが數々の女達に抜かせたためでごんせう」といふので、こんがり狐色の一からみがあるのである。したがつて眉毛の少い男、これ即ち大の色事師といふことにもなる。

土人娘はなか／＼深切である。男が頸が痛いといへば、手の指に房なす髪の毛をまきつ

けて、上手に頭をもんでやるし、時にはうまいマツサージの方法として、脇でぐりぐりと肩をきめつけてもやる。かの女はまたユダヤ人の堅琴のやうな樂器をかき鳴らして、若者の心を自分の部屋に惹きつける。若者は戀の行進曲がすらすらと進められさへすれば、かの女のそばにただひとり夜を明して、ほのほのと朝日の昇るころまで心樂しむのである。

この状態にまですめば、若者はいよいよその奥の手を出して、結婚の申込みに取りかかる。まづだれか自分の友人に心の内を打明け、乙女の両親に向つて結婚の希望を傳へてもらふ。申し出でを受けた娘の両親は、うすうすいやすつかり二人の關係を知つてゐても、一應は驚いたといふ顔附をする。この時もしも娘の親達が、二人の結婚に同意の意志があるならば、男は娘の家族に對して、眞鍮の銅鑼または高價な飾り玉を、その眞情の表徴として贈る。この贈り物は二人の結婚が破れる場合には、たとひ男の操縦がまづくて破れた場合でも、男の方に返還されることになつてゐる。両親が同意をした場合には、まづ娘の親から娘の未來の夫に向つて、一組の玉の首飾りを贈り物にするのが禮儀になつてゐる。まづここまで段取りがすすめば、二人の關係を公けに披露する必要ができて来る。そこ

で許婚の形式が成り立つわけである。友人や親類達はこの二人の結婚について、それぞれの忠告や、時には一應の反対も試みるのであるが、その手順がすむと、更にこのことを酋長に報告する。酋長がその結婚に同意を表すれば、双方の両親といへども、もはや反対はとなへられないのである。そこで前述の銅鑼贈り、首飾り贈りとなるのであるが、これ即ち結納であつて、時にはこれらの品物の代りに、貨幣をもつてすることもある。

土人の御幣かつぎ

さてこの婚約の前後において、土人は土人なりに種々の御幣かつぎをする。たとへば婚約前後において、兩家の近所で或る種の鳥が鳴いたり、あるひは鹿の鳴き聲がきこえたりすることは、まことに不吉な前兆であつて、このために前途を祝ふよき前兆あらしめんがために、種々の技巧もこらされる。たとへば婚約前において、わざわざ森の中に入つて、よき前兆と考へられる縁起のよい動物をとらへて来て、家の近所に放しておくといふやうなことをやる。

南洋に産する啄木鳥の鳴き聲、スパイダー・ハンターと稱する鳥の鳴き聲、或ひは高く鷹の飛びまふさまは、この上もない婚約の瑞兆と見なされてゐる。そこで婚約の兩家に関係のある者どもは、これらの縁起よき動物を時にとつての景物として、重大な一役を演ぜしむべく、前もつて用意することに苦心する。もしも不幸にして婚約に際し、悪しき前兆を告げる動物の現はれた時には、その婚約は双方合議の上で、一ケ年間延期されることになる。

この結婚延期の不吉なる前兆に遭遇したる若者は、自らを試さんがために、村を後にして飄然たる旅に出る。この旅の途中において、かれが前に選んだ乙女に優る、よき娘をさがし當てようと試みるのである。しかしこの旅において、遂に元木に優るよき乙女を見出し得なかつた若者は、村に歸つてよき前兆をさがして、再びもとの娘と結婚といふことになる。

結婚の時期は普通收穫期の後の新月の現はれる時で、この時がもつとも幸ある結婚の時期と考へられてゐる。ダヤクの結婚式には、その前日花婿はおびたしい蒟醬と、美味な

る果實を手に入れんがために、多くの時間と努力とを費さねばならぬ。いふまでもなくそれは、結婚式當日の饗宴に用ゐられるのである。

花婿の出陣

カヤンの花嫁は、その花婿および部落の人々から、おびただしい贈り物を受ける。むしろその花嫁の家柄の高下によつて、おのづから贈り物の多寡に區別がある。

結婚當日、花嫁の家では双方の親類知己をおほぜい、家の長々しい廻廊に招いて饗應する。その朝早く花婿は、身内の主だつた者どもおよび、多くの武器に身を固めた戦士を引き具して、近所の濱邊に出で、艦装をこらした軍艦に打乗つて、花嫁の家に向ふ。たとひ花嫁の家が、花婿の家と目と鼻の間にあつても、この戦さ行列に變りはない。船が花嫁の家に近き岸邊に着くと、この花婿の一隊はいさましく上陸し、巨大な眞鍮銅鑼を打ち鳴らしつつ、賓客集ふ廻廊の饗宴場へと、乗り込むのである。

花嫁の家の玄關には、山の如き贈り物が、今日を晴れぞと、ところ狭きまで置き並べら

れてゐる。花婿の一隊は、まづこの山と積まれた贈り物によつて防備せられた玄關にと、突進する。そして勢ひ猛に、その玄關の戸を押し破らうとする。かくと見て花嫁方の一隊は、この晴れがましき侵入軍を防がうと逆襲する。寄せては返し、返しては寄せる晴れの日の小競合ひが、二三度くりかへされて、トド花婿の一隊が結婚の式場に入る。

かくと見るや、かねて式場に待ちかまへてゐた花嫁は、ひらりと身をかはして、部屋を逃げ出し、隣の家の一室にとかくれる。婿方の面々はその行方をさがすが、花婿は悠然と式場の中央に坐を占め、巻煙草の煙を輪にふいてゐる。やがて暫らくあつて、花嫁はいかにも同情にたへぬといつた様子で、自分の女友達數名を引きつれて式場に現はれる。しかし花婿は、どこを風が吹くかといふ顔つきで、すましかへつてゐる。

が、それもひと時、花婿は潮時來れりと見ると、やをら携へ來つた花嫁への引出物をそこに並べ、更に新しく持参した銅鑼を、かねて贈つておいた結納の銅鑼と、一對にして並べておく。

式はいよいよ本筋に入つて、ここで媒酌人が一匹の豚を、その場で刺す。時にその豚

の切口からほとばしり出る鮮血が、列席の一同にはねかゝるのは、この新しく結ばれる二人の上に、幸多き未来が約束される前兆となるので、心得た媒酌人はわざと手ぎはよく、豚の血が列席者に散りかゝるやうに、刀を揮ふのである。

これがすむと、花嫁と花婿は置き並べられた二つの銅鑪の間を、六度行きつ戻りつ往復する。つまりこれが、日本の三々九度に相當する式典であらう。これで式は終り、お開きとなつて、後は目出度く披露の宴で、夜がふけるのである。

花嫁花婿の鬼ごっこ

この結婚式において、花嫁が逃げ廻るのを、花婿が引き捕へる立廻りを演じることもある。またいつそ御念の入つたのでは、まづ花婿の一隊が船に乗つて花嫁をさらひ、漕いで逃げる後から、花嫁の一族がどこまでも追ひかける。花婿の船では追手のせまるのを引き離すために、船の上から相當に貴重な品物を、土手の上の花嫁の一隊に投げつゝ逃げる。この投げ物が充分といふところになると、追手は初めてその追跡をやめ、ここに目出

たく平和の手打ちとなることもある。

結婚式がすむと、男は當分の間、その嫁方の両親の家の一室に住はなければならぬ。これは一つには二人の新居を造る間のつなぎであつて、この間に二人の新家庭を結ぶ新しい愛の巢が、男の方の部落に造り初められるのである。また二つにはこの間の一年内外、新郎は嫁方の両親の家の田畑を耕やし、種々の勞働に奉仕するのである。

ブナン土人のはこのカヤン土人の風俗とは反對で、新たに結婚した夫は、妻方の社會に所屬することとなり、妻の部落で生活を立てる。また結婚に際しても、花婿の方からは、若干の煙草を贈呈する位のもので、特に物々しい結納品等は、贈らぬ風習である。

シヤムのグロ風俗

前を隠して尻は丸出し

シヤム人の服装は、男も女も幅二尺五寸、長さ六尺ばかりの布片で、その中央部を體

のまはりに巻きつける。即ち腰から膝にかけてその布片で包み、端を結んで両端を垂らすのであるが、この垂れた両端を繩のやうにより合はせ、それを股の間から背後に廻して、腰の真中に引き上げる。これを前から見ると、半ズボンの如き外觀となるが、背後から見ると、まことに夏向きの開ツ放しで、大腿部が丸出しである。

昔はシャムの淑女達はバヌンと稱して、この巻き布をスカートにした。なかなかスマートな、イットに富んだエロ百パーセントのいでたちであつたらう。ラオの婦人達は、今でもこのスカートを着用してゐる。バヌンを支へる帯は、女は用ひず男が使ふ、ところで面白いのはこのバヌンの地色であつて、昔は一週間の日によつて、各々その色を別にする法式になつてゐた。即ち日曜日は鮮紅、月曜日は銀鼠、火曜日は赤、水曜日は緑、木曜日は雑色、金曜日は淡青色、土曜日は濃青色となつてゐた。

シャムの田舎では、しかし織物が手に入りにくいので、ときにはこのバヌンの上に、モスリンの胴衣を着けるものもあるが、一般にはまづこのバヌンだけで、上衣は何も着ないことになつてゐる。都會人はこの國でもなかなかおしやれで、ヨーロッパ風の氣のきいた

上衣や靴など、何かと粹をこらしてゐる。都女は長い靴下もはき、踵の高い靴もはいて、顔には黄色い白粉もつけてゐる。

春日麗かな巡禮の群

シヤムは佛教國であるだけに、その祭日や催しは、いづれも佛教に關係のあるものが多い。佛教徒の多くが考へるやうに、シヤム人も來世の幸福を望むためには、現世においてはよき功德を積まなければならぬ。さうしてこの功德の主なるものは、寺詣りと僧侶に貢物を捧げることである。この施行は、一定の季節に行ふ習慣になつてをり、これが信徒にとつて、一種の快き娛樂の一つとなつてゐる。

毎月、月の内の四日間は、シヤムの聖日となつてゐて、この日にはシヤム人は、いづれも祭の晴衣に着替へ、心ばかりの供物をたづさへて、寺詣りにと出かける。四月の佛陀の誕生日とかれの入寂日には、シヤムの寺院では三日に亘る一大法養が取り行はれ、夜に入つては、篝火やイルミネーションや、演劇等の催しがある。

十月には、「僧衣施行」といふ、盛なる祭がある。この祭日はほとんど一箇月に亘つて行はれ、その季節の終りには、おびただしい金をかけて、鬱金の布を買ひ込み、これを衣に仕立て僧に贈る。僧はこの時ほとんど一年中に着盡せぬほどの衣服を、いづれも贈られるのである。この施行には、上は王侯貴族より、下は賤しき庶民に至るまで洩れなく参加し、施行を無上の名譽とし、功德を積むもつともよき機会と考へてゐる。この祭禮には、王の参拜があり、その行列は海陸を歴して、たとへやうなき、壯麗をきはめるのである。

二月には、ブラバート祭といふのがある。この祭には、人々はバンコックからやや離れた、山々に巡禮に出かける。その山には、佛陀の足跡と傳へられる遺跡がある。この足跡は長さ四尺餘あり、足跡といふよりも、むしろ浴槽に似てゐるが、とにかくこの自然石の上に印された、巨人な足跡の如き窪みに向つて、心からなる祈りと敬意を表するのである。この足跡は、シヤム人にとつては、非常にあらたかなる靈験があると信ぜられてゐる。

二月の月齢がやうやくすゝみ、満月の近づく頃、信仰あつき巡禮の善男善女をのせた、廻遊列車が仕立てられる。この汽車はこれらの人々を、かの丘の上なる靈地に送る。これ

より數日の間、聖なる丘につづく道は、玩具や、繪馬や、時計や、その他様々の、心をこめた供物をたづさへた巡禮の人々で、終日ぞろぞろと蟻の行列のやうな、にぎはひを呈する。人々の携へ登る供物は、いづれもバンコックの町から買ひ込んで来たもので、これを山上の御堂の壁や、周囲へ、思ひ思ひに奉納するのである。夜はさわやかな月光を浴びて、御堂では讀經が續けられる。

地に酒を撒いて

このほか、シヤム人が行ふ宗教的あるひは精神的の儀式の一つとして、年始祭といふものがある。

これは四月に行はれるので、この月にシヤムでは、ソクランといふ新年を司る神が、地上に降臨すると考へられてゐる。シヤムの僧侶は新年の數日前に、このソクランの神が地上に降臨すると考へ、これを宮廷の儀式と結びつけてゐる。この日全國の民草は、いはゆる灌奠といふ祭儀を行ひ、地上に酒と水とを澆ぐ。宮廷に於ては、この儀式が非常に

莊嚴にとり行はれ、王は佛僧とともに非常に嚴かな儀禮によつて、灌水の式を執行する。

しかし民間においては、この儀式はすこぶる快活暢氣なものとなり、一種の水合戦の遊戯となつて、この水合戦において、リーダーとなる者はいづれも若い女子で、これが先立ちで水の打掛けつこをやる。ためにいづれも、頭からすぶぬれのぬれ鼠となる。この儀式はソクランの神が、再び昇天するといふ祝詞が下るまで、嬉々として続けられる。

十月には、河の神を祭る盛大な河祭がある。これをロイクラトンまたは「バスケット流し」といふ。それは河神に捧ぐる供物を詰めたバスケットを、河に流すからである。パンコックではこの儀式は夜間に行はれ、流すバスケットには灯を入れるので、その眺めはすこぶる美しく風雅である。つまり日本の燈籠流しに相當する。

年々執り行はれる祈年祭は、すこぶる古い起原をもつ祭で、當年の收穫を感謝し、來年の豊作を祈念する祭である。この祭はまた年始祭に似た降神祭の一つで、一人の貴人がインドラの神に扮し、祭を司會して、遠き伽藍から町の廣場へ、行列を組んで練つて來る。廣場には高さ百尺のぶらんこ臺が設けられ、ブランコの綱の長さと同じ間隔をおいて、そ

の側に一本の長い竹が立てられ、竹の中途には貨幣を詰めた小さな袋が縛りつけられてゐる。インドラの神がブランコ臺に到着すると、待ちかまへてゐた群集は、一度にどつとブランコ臺の圍りになだれ集る。すると群集の中から、雨神のいでたちをした四人の男が現はれて、ブランコに乗り揺りはじめる。さうして綱が一杯に振れると、齒をもつてブランコに揺られながら、くだんの竹竿の途中にしばらくつけてある金袋を、噛み取るのである。この放れ葉が首尾よくやりとげられれば、群集は手を打ち足を踏み鳴らして、どよめき騒ぐ。もしやりそこなへば嘲りの笑聲を送る。この催しは、雨の神とインドラの神との間に一種の賭事をするので、この勝負で雨の神が勝つて、金袋をとるといふことになるのである。しかしこの祭の最初の意味は、今は多少失はれてゐるやうである。

レクナ即ち「鋤入れ祭」は、農耕に關係のある神々の靈を慰め、來るべき收穫に對して、豊作を祈るために制定せられたものである。この祭は耕耘の季節に行はれ、まづその年の最初の鋤を役人が入れる。或る時代には王自身がこの祭儀を行つたが、今ではたとへば農林大臣のやうな、その道の高官が行ふことになつてゐる。この司祭者たる高官はその祭儀

において、美々しく飾り立てた牛にひかせた黄金の鋤をとつて、耕田を三度往復する。これがすむと、豫て耕田にはいつばい種を蒔き散らしてあるので、式に列した人民達は一度にどつと田の中になだれ込んで、蒔き散らされた種子を拾ふ。この種子を種蒔きの種子に混じると、すばらしい豊作が得られるといふ迷信があるのである。

またこの儀式において、鋤を牽いた牝牛の前には、諸種の穀物がおかれるが、この穀物を食つたものは、その年いつばいは非常に貧乏をすると信じられてゐる。かくて祭の式は、當年の豊作を祈願することによつて、閉ぢられるのであるが、この鋤入れ式を司會する農林大臣の人格が、その年の豊作凶作の如何に關係すると考へられるので、人望のない農林大臣はこの鋤入れ祭には、農民どもに忌避される。

悪魔拂ひ

シヤム人はいろいろさまさまの精霊が、この宇宙のどこにもあるものと信じてゐる。たとへば、軒下には魘魅が棲むとか、夜は妖魔が子供達の足の裏をくすぐるとか、その他い

ろいろの魔物が、到る處に在ると考へてゐる。山には山の精霊があり、川には川の精霊、湖水や、断崖には、湖水や断崖の精霊があると考へる。岩や小川や、樹木には森の精霊が在り、男の腹やその所有地、庭園、或はその他の所有品にはそれぞれに地精が宿る。各家のヴェランダ、或は庭園、人形の家には、それぞれ一種の幽霊が宿り、それらの精霊はいづれも、その家が悪霊に襲はれることを防いでゐるが、一朝これ等の靈を粗末にするときは、守護神變じて害悪の禍の神となる。そして種々の凶事をもたらすのである。

精霊はいづれも先天的に悪意のあるものであるが、或るものに對してはすこぶる弱氣である。たとへばかれらの好む供物等に會ふと、すぐに籠絡されてしまふ。しかし中にはすこぶる怒りつほくて、御氣嫌のとりにくいのがある。そしてこの種の精霊の怒りのために、人間の生涯の不幸が植ゑつけられるやうなことがある。洪水や、暴風雨や、地震や、すべての天災、不幸などもまた、ある種の精霊のなす業と考へられる。都會や、宮殿もやはりこれ等の精霊の中の勇壯なる類ひのものによつて守護されてゐる。その精霊はいかにして造られたかといふと、古き昔において、健康な臣民の咽喉を裂くとか、あるひは生きなが

ら善良な臣下を壁の下や、玄關や、其他建物の急所急所に埋めるのである。つまり日本でも行はれたと傳へられる人身御供の風習が、シヤムにも行はれたので、この敬虔なる捧物によつて城や、都會の守護を司る精靈が慰さめられ、その結果これ等のものに災害をあたへんとする他の惡靈に對して、常に勇しき防備の戦闘に備へてゐるのである。

さらにシヤムにおける醫術は、そのほとんど全部が精靈の驅使にあると言つてもよい。そこには藥草の使用もかなり行はれてゐるが、醫者はほとんどすべて魔法使ひであり、あらゆる病氣は精靈の操縦によつて、治癒されるものと信じられてゐる。しかしさすがに外科醫だけは、患者を治するに醫藥を用ひ、その醫藥は他の病氣における魔法の力と同等の効力があるものとしてゐる。

また舞踏や、音楽や、或はたえず入浴すること等も、病氣の治療法として用ひられてゐる。魔法師は、患者の病魔を退散させるために、息で吹いたり、唾氣を吐いたり、或は緑の樹枝を振つたり、口笛を吹いたりする。つまり一種の清積ひである。一般に佛教はかくの如き精靈の力を一種の幻想であると教へるのであるが、シヤム人は佛教を信じる一方に

において、その佛教の教にもかかはらず、かうして多くの精靈に關する迷信にとらはれてゐるのである。

シヤム人の佛教に對する信仰は非常なもので、かれらが後世の安心を祈るために、その生涯の理想として憧れ望むことは、たとひ身は貧にして王者の奢をつくし得ずとも、一基の卒塔婆を建立することにある。それ故幸ひにして巨萬の富を得た者は、何を措いても、まづ第一着の仕事として、身に出來得る限りの費用を投じて、塔を建て寺を建てる。これが彼等の、この世に於ける最上の欣求なのである。

ビルマの花嫁

安産のおまじなひ

ビルマの人々は、出産はその母親にとつて、最も苦しい仕事の一つであるといふことを強く考へてゐる。さうしてその昔から傳はるお國風の習慣は、まことに厄介至極なもので

ある。

妊婦の分娩が始まると、まづ妊婦またはその母、或はその女友達をして、一種の女神ルシア（この神は西方の淑女と呼ばれる）に、供物を供へさせる。ビルマでは、宮廷における西方の宮殿は、いつも女人の居所になつてゐるので、この女神の稱呼が出来たのであらう。さてこの女神への供物は、一升の米と、少額（すうがく）の金（普通二ペンス半）と、ニンニクの頭數個である。これ等の捧げ物を供した上で、その祭の使者は次のやうな祈りの言葉を口誦む。「生命の門をいや廣く開かせ給へ。さらば新なる生し子は入り來らん。苦痛と悲哀とは出で行かん。喜びは永久に消えざらん。」

この祈禮終つて、女はその産褥に横たはる。そして、いよいよお産といふことになるのであるが、このお産の手數料としては、助産婦に、一ルービー（我國の約六十六錢に當る）または八アンナ（我が約五十錢に當る）を祝儀として贈る。しかし家が貧しいとか或は其他の事情で金を用ゐない時は、その代りに薪を贈ることになつてゐる。この時に用ゐられる特殊の小刀は、お産の終つた後、火の中に入れて焼き捨ててしまふ。

産婦の悩みは、この瞬間から始まる。そこで産婦は、西方の淑女のよき意志を得ようと、いふ手段を採りはじめる。産婦はまづ手の掌に生米を載せ、西の方に向つて身を屈し、

「神様、私を脅かさなさい。私を昇奮させなさい。私を少しも傷けなさい。私の息を止めなさい。」

そこで掌中の生米を、浅い木皿の中に移す。この米と木皿は、次の週に彼女に用ひられる。部屋は一切通風を止められる。さうして室内には、常には見ることの出来ないやうな大きな焚火がつづけられる。若き母は毎日三回づつ、全身に鬱金をすり込まれる。

産婦はまた毎日熱い湯に入り、腹をもみ、それが終ると、八尺から九尺位の布巾を腹に巻きつける。またその頭には五筋のターバンを巻き付ける。これは頭痛を防ぐためらしい。更に産後の薬として、熱い湯にサフランと、食鹽を溶したものを飲む。またサフランと食鹽とを練りまぜて、榛の實大の丸薬に丸め、これを一つづつ、佛、法、僧即ち三寶に供へる。しかしこれ等のことはすべて、出産の主なる儀式に入る前觸のやうなものである。出産の主なる儀式は、まづ特殊の薪を燃やすことである。これは、「火の井戸」と言はれ

るもので、絶えず室内を温ためて、産婦の冷えるのを防ぐのである。この火の井戸の火は、晝夜の別なく保たれ、産婦は日に一度づつ、この火の前に置かれた椅子に腰掛けて體をあぶる。この時産婦は顔を火に向け、その前部を除いた背中や、體側には着物や毛布をすつほりかけて、寒さを防ぐ。體の前面がすつかり温ると、掛け物を前にすらし、今度は體の右側をあけて、充分火にあて、それがすむと背中、最後に左側といふ風に體全部を焙り温める。これ即ち火の沐浴である。サフランと食鹽の熱湯は、この時にも飲まれ、特に他の場合よりも効目が多いと考へられてゐる。しかしこの火の沐浴は、焚火の煙がかなりひどいので、あまり愉快なものでないらしい。

搖籃まつり

かういふことが七日間続けられた後、産婦は初めて、一種のトルコ風呂に入る。そこで彼女は約一時間に亘つて、タマリンドの葉や、その他いろいろの草木の葉を煮上げた湯氣にあたる。しかしこの蒸氣浴も素裸でやるのではなく、湯氣の通す毛布の様なものを體に

巻きつけてやるのである。約一時間でこの蒸氣浴が終ると、今度は冷水浴をする、これは足部の膨脹を防ぐものと思はれる。しかる後産婦は、極く僅かではあるが、地上を歩く。この散歩は七歩以下に止められる。

この七日が過ぎて後、産婦は初めてその生兒に接することが出来る。また本當の意味のお産の祝も、この日から始められるのである。お産の祝がすんでしまふと、産婦はそれまで自分の生兒の世話をしてくれた産婆に、お禮の挨拶と贈物をする。この謝禮は金でしたり、またその他の品物ですることもあるが、金の場合には貧富にかかはらず、如何なる場合でも必ず四アンナときまつてゐる。

さてこのお七夜が済むと、こゝに生兒の搖籃祭が行はれる。この祭はどういふ風に行はれるかといふと、まづ新しい搖り籃の四隅に布束を置き、その布の上に粉のかぶつたまの米或は粳穀をとつた米を少しづつ載せ、お金を少々ばかりと、椰子、菩提樹、草等、いろいろの草木の葉を載せる。ビルマでは、一週間の日にちなんだ、いろいろの意味をもつた草木の葉がある。この搖籃の上の布束に載せる草木の葉は、その種々な意味をもつも

のを、出来るだけ多く集めるのが一番よいのであるが、もしもそれが出来なければ、子供の生れた日に関係のある葉だけでも集めなければならぬ。

これがすむと、搖籃の上に、被布をかける。もし子供が男子であれば男の衣裳を一揃ひ即ち胴着、ジャケット、ターバン、腰刀。女ならば金銀の装身具、鏡、櫛、ルビーの指輪、耳輪等一切のものを載せる。更にその上には、ビルマの婦人が顔料として用ひる、サナカと呼ばれる白粉をすつかりふりかける。

搖籃祭の設備はこれで一通り出来るのであるが、この支度が整ふと、生児には形式ばかりの食ひ初めの儀式をする。御承知の通りビルマ人は、好んでライスカレーを食べる國民である。そこでこの生兒の食ひ初めにも、米飯にカレー粉を添へ、これに一匙の水をつけて食はせるのである。この儀式を行ふのは生母ではなく、すべて産婆が手を下す。さて初めの式が終ると、白い七本の木綿糸を撚り合せたものを、生兒の手首、足首、咽喉頭に結びつけて後、産婆が、ソープ・アカシヤの實で作つた剃刀で生兒の頭髮を剃りこぼす。剃り落した頭髮は、のこらず白布に包み、かねて用意の熱湯を入れた瓶の中に納め、式後捨

てさせるのである。この時普通の嬰兒は、多少むづかりはするがさまで泣き騒ぐやうなことはしない。頭が丸められると赤ん坊は搖籃に載せられる。この間に、赤兒の家を守る精靈が飛び來つて、この新しき神の奴隷に宿るのである。

命 名 式

ビルマ人の家にはどこにも、その軒先に、椰子の實を入れた竹籠をぶら下けてゐる。これは、その家の守護神たる精靈のシムボルで、一年に一度、年の始めに取り換へられる。ところがこの椰子籠を取り替へる日がなかなかやかましいので、水曜日、或は新月の第四日、第六日、第九日を必ず避けなければいけない。しかるにこの籠は、新しく子供が生れると、その時期の如何を問はず取り替へられる。

搖籃式に際し、この守護神を象徴する籠が新しく取り替へられると、今度はこの籠に對して、鄭重な供物が行はれる。この供物の御馳走の品は、まづ母親の志として、バナナ、檳榔子、草花、摘茶、生兒の志として菓子、シロップ、鶏卵、米飯等である。特に生兒は、

若しそれが男子ならば黄布の僧衣を着せられる。これは佛法の法式に従つたもので、この式において、生児が早くも佛門に入ることを示すのである。

生児を搖籃に載せると、家族の最年長者が、その搖籃を七度搖り動かす、

「この子に百と二十の齡あれ。この子よ賢しくあれかし。この子よ富めよ、この子よ容貌うるはしくあれよ。」

と唱へる。

命名の式には、一家の親類はのこらず、村の長老達隣人達、家に入れるだけの賓客を招く。招かれた賓客達は、彼等の最上の衣服をまとうて、産家に集り車座になつて、まづその地方において、最も古い草分け時代からの出来事を語り合ふ。その談話の間に、一座の長老の一人が、突然思ひついた生児の名を提言するのである。この命名はその後十四日の間、その両親によつて慎重に吟味せられて、その採否がきめられるが、實際には多くこの長老の選んだ命名でなく、新しい名が選ばれる習慣になつてゐる。このやうに生児の命名の權利はその両親にあるが、しかしその權利は一定の範圍に限られてゐる。生児の名は、

父母の名を各々もちつたものになければならない。またビルマ人には、姓即ち、一家族を表はす名は無い。そこで實際上は、多くその子の生れた週日の名で、きめられることが多い。

ビルマ人の家庭に入つて、最初に驚かされることは、小さな少女が、すばすばと大人のやうに、ビルマ特有の葉巻煙草を喫してゐることである。そして親達は平氣で、子供の欲しがるままに、自分達の喫してゐる煙草を、いたいけな子供等に與へてゐる様は、不思議といふ外はない。またビルマ人の衣服は甚だせたくで、その胴衣や上衣には絹やリンネルのやうなぜいたくなものを用ひ、おまけに、その衣服には非常に繊細な色彩を施してゐる。そして親達は小さな時分からその子供達に、衣服の選擇等を自分の好みに任してゐるので、子供といへども割合にそれ等の好みや知識が發達してゐる。

子供が七八歳になると、小學校に入れるのが普通であるが、これは歐風化したビルマ人の子供で、一般には佛教式の修道院に入れる者が多い。更に十二三歳になると、男子は僧院に入れられ、こゝで一通りの出家生活をして、一人前の公人となるのである。

處女成人の式

ビルマの男子の生活は、大體上に述べた様に、一種の佛教の信仰を中心にしたものであるが、女子の生活はまことに虐げられたもので、それはほとんど動物の生活に等しいと言つても過言ではない。彼女等には佛徒としての洗禮は全然行はれない。また僧院や尼寺に入ることも許されない。彼女等が望み得る最上のもは、卒塔婆や靈廟の前に跪まついて、佛陀に花を捧げ額を床上にすりつけて、火の如き熾烈なる祈願をこめて、來世は男に生れるやうに願ふのみである。

少女は普通十二歳乃至十三歳、中には六歳乃至七歳になると、その耳朶に穴を開ける。そしてその穴に耳飾りをはめるのであるが、その耳飾りがはめられる迄は一切寶石類を身に着けることが許されない。また少女時代はいづれも耳の上に垂れる頭髮即ち鬢の毛を延ばすことが出来ない。これは既婚の印となるからである。それ故未婚の少女は、前方から見ると、その處女の喜びと、娘の魅惑をこめた耳たぶを丸出しにしてゐるのである。

この耳飾りをはめる人は、そればかりを職業にしてゐる専門家があつて、これが銀又は金製の針で、をしけもなく娘の耳たぶに開けるのである。この耳穴あけの式の前には、占星術師を呼んで、娘の前途の運勢を占はせるのが例になつてゐる。穴を開けるにはまつ耳たぶの下にコルクを當てて、そのコルクごと針を耳たぶに突き通す。なにしろかなりの荒療治であるから、小さい少女は一種のヒステリー状態に陥りひどく泣き騒ぐ。そこで密つてたかつて娘の手足をおさへ、その泣聲を消すために、騒々しい樂隊で囃し立てる。かうして二本のおそろべき針は耳たぶに残され、皮膚がすっかり癒えるまで、日に一二回づつぐるぐると揺り動かされる。そこで皮膚がすっかり癒えたと針を抜いて、その代りに草の莖を穴に差し込み、毎日毎日一本づつその草の數を殖して、つひに手の指が自由に出し入れ出来る大きさにする。そしてこの穴が出来ると、そこに耳飾りをはめるのであるが、ビルマ人の耳飾りは、さ程大型のものでなく、直徑四分の三インチ、長さ一インチ位のものである。材料は琥珀が普通であるが中には色硝子を用ひるものもある。祭の際等、富裕なものは、寶玉の兩端はめ込みになつた金管を、はめることもある。少女達は野遊びの

際や市場行きの際、この耳穴に葉巻き煙草を挟んで行くこともある。男もまたその耳たぶに穴を開けるが、それは多く富裕者に限られてゐるやうである。

處女の張り店

かうして少年なり少女なりが、成熟した一人前の大人になる。男子は僧院生活を終ると、入墨を終ることによつて成人の資格を得る。女はすでに一人前となれば、寶石を身につけることが出来、更に進んで編物や、裁縫や、料理や、村の共同井戸へ行つて水を汲むことを習ふ。娘が一人前になると、ぞろ／＼と大ぜい、いづれも土地の市場や、バザールに出かけて、露店の店番を仕始める。そこで彼女等は、生れながらもつてゐる商賣の本能を磨き、世智を養ふのである。更にこの市場への進出によつて、ビルマの成熟少女は、結婚促進の機運を作るのである。つまり露店の張り店に出てゐる程の少女は、すでに結婚期に達したことを現はすので、青年はだれでも結婚を申込んでよいのである。

だから露店に出ても彼女等には、品物を賣ることは問題でない。實際にビルマの市場へ

行つて見ると、それ等の少女が店で賣つてゐるのは、多くは藥品類で、中には絹物を賣つてゐるのもあつて、これ等は多く富裕な家の娘達である。彼女等がかうして家から市場へ出るためには、普通相當の道程を歩かなければならない。そして市場に出てゐる彼女等は、かなり美しい着物を着てゐるが、それは市場へ到着して着替へるので、店への行き歸りには、ふだん着のまゝが普通である。露店はいづれもすつかり開け放なしにしてゐて、だれでも外から中の様子が見られるやうに丸見えになつてゐる。従つてその化粧部屋は全く開放的である。これはほかの國の婦人達はその化粧部屋を密閉するのと、餘程趣きを異にしてゐる。そこでこの開け放しの化粧部屋を一のぞきして見よう。

垣間見る處女の素肌

彼女等が市場に着いて、露店の屋臺の組立を終ると、まづ第一着に初めるのが顔のお化粧である。ビルマの娘達もまた、女なみに白粉を顔につける。この白粉はビルマ特有のサナカと呼ばれるもので、一種の灌木の皮や根を極く細かに砕いた粉だ。これを泥膏のやう

に練つて、顔や、首筋くびすぢに充分に塗り上げて乾かす。これだけに一時間は充分かゝる。それでその乾くあひだの長い時間を利用して、彼女等はすこぶる落着いた物ごしで、髪をたばねるのである。頭髪には椰子油やしあぶをつけるので、すこぶる美しいつやがあり、その丈も長く、中には三尺に餘る見事な髪の持主もある。まだ年が行かないために頭髪の延び方が充分でない娘達は、頭髪のかさをつけるために、かもしやたほを入れるので、それ等のものを麗々しく自分のそばにおいてゐるのは、いかにも我が身の若さを見せびらかしてゐるかの如くである。しかもこの娘達の用ひるかもじやたほは、めい／＼の兄弟が出家のために頭を丸めた時に、剃り落した毛を用ひてゐるのだから面白い。

これ等の身じまひの間中、ビルマの少女は一般の習慣として、だれでも蒟醬きんまをかねてゐる。それはあたかも、日本の古い茶屋女が、便所の中でもほゞづきをきゆう／＼鳴らしたり、モガやモボがチューインガムをかねてゐる様子である。頭髪の手入れがすつかり出来上り、束ねて大きなものすごい止め針で止めると、彼女等はまづ一服といふ様子でビルマ特有の太い葉巻煙草はまきとばこに火をつける。そこで顔の練白粉が乾いたならば、顔から首へかけて、

掌てのひらでたんねんにこすり上げ、びか／＼とエナメルエナメルのやうな光澤を出す。それもすむと、鏡に向つて、と見かう見四方八面からためつすがめつ映して見て、化粧の出来ばえを調べらる。さてそれからまた一苦勞で、白粉がうまくのつたとすると、バラや蘭のやうな、紅または黄の花びらから搾り採つた紅で、眉をひき目隈めくまを入れる。これで髪は烏の濡羽色ぬたばいろ、顔は京人形のやうにこつてりと、またびか／＼と塗り上つて、顔の化粧は一通りすむ。頭には、男が用ひるターバンのやうな絹の布片を掛けるか、或はスカーフのやうなものをかける。

看板娘を蕩らすには

さて娘はこれで、今日一日の戦闘準備が出来た。彼女はほつとして、すひさしの葉巻煙草に火をつける。そして隣の店の者に話しかけて、或は店の前を通り過ぎる顔見知りの人や、地廻りの男達に媚笑を送り挨拶をおくる。その態度は、その話振りは、如何にも自由で快活でほがらかである。そして如何にも落着きはらつて、魔場に、あたかも自分が完

全な女としての美點を、五つも六つも備へてゐるかの如く、隣人や地廻りの愛想のよいお世辭を受けるのである。

この娘の張り店において、他所者がいかにじやらついた様子をして、ビルマ人はその男が娘を誘惑してゐるものとは決して思はない。しかし土地の若者が、たとひ言葉には出さずとも、特殊な意味深長な秋波等をくれると、すぐにその若者は物笑ひの種にされる。娘は男達が通りがりにお世辭の一つも言へば、必ず嬌姿を作つて、愛嬌たつぷりな會釋を返すにきまつてゐる。しかしその愛嬌を早呑み込して、すぐ店の中に飛び込んでじやらついたり、しなだれかゝつたりしてはいけない。市場ではからかひごとや無駄話は一切禁物、じやらくした行爲はすべて許されない。その代り古い習慣は、さういふ濡事のため、ちやんと一定の場所をきめてくれてゐる。それは娘の家である。「男の口説は構曳の節」といふ諺もあり、多く夜の八時から十時にかけての時刻である。この時間こそ、ビルマでは公然許されたる女性誘惑の時である。この時以外にふざけた眞似をする奴は、すべてこれ皆ひやかし者と見做される。

青年團の娘狩り

ビルマの情事は、一定の認められた原則のもとに行はれてゐる。各村或は各區には、女の尻を追ひ廻す輩から成立つた獨身クラブのやうなものがあり、それには一人の團長がゐる。クラブ員の統率に當つてゐる。この色隊どもの會合するのは、いづれもとつぷりと日が暮れてからのことで、まづその夜の戀狩りの作戦をきめ、一人或は二三人づれで目ざす娘の家へと出動する。

娘の方でも戰闘準備をさく／＼おこたりなく、夜目にもけさやかな装をこらして、窓邊に寄り、よき敵今や來ると待ちかまへてゐる。こゝらが南國ビルマの奔放自在な開放的な所とでも言はうか。娘の家に忍び寄つた男は、口笛を吹いたり、ゴホンとわざとめかした空咳をしたり、用意の横笛を妻戀しげに吹き鳴らしたり、或はビルマ特有の風俗として、右の掌でビシヤリと左のあらはな腕を打ち叩く合圖をしたり、少し圖々しいのは開け放しに、「ヨー愛子サーン」と、思ふ女の名を呼びかけたりする。

この時男の訪門が、娘方から拒まれるやうなことは滅多にない。ところで少々具合の悪いことには、一般の不文律として、この娘の部屋には、よせばよいのに必ず娘の両親が控へてゐる。そこで戀狩りの若者は少々顔の皮を厚くして、娘やその両親達と、天氣の話や、百姓ならば作物の出来榮え、村の祭の話等、面白くもないお座なりを語り合ふ。とかくするうち、潮時を見て、娘が言ひ出すか、娘の両親が言ひ出すか、或は待ち切れないで、男が厚かましく言ひ出すか、そこはその夜の出来次第で、ともかくも皆が「モウ眠い」と言ふことになつて、いよ／＼おひけで、両親も若き二人も、別々の寢室に退く。

娘と若者は一室で

いよ／＼本舞臺に入るのである。そこにはもはや、だれ一人邪魔者はない。甘い蜜のやうな、戀のさゝやきの時は、今與へられてゐる。男はこの絶好の機會を期して、舞臺や本で讀みかじり聴きかじつた、自分のおほえてゐる言葉の中で、最もうるはしい最も詩的な言葉を用ひて、日頃の思ひを舌によりをかけて、女を口説き立てる。無論目に涙を浮べた

り、我が胸を抱きしめるやうな身振りも交ぜる。女もそれに相當した、ロマンチックな應答をする。

たゞしこの際、西洋流にキスをしたり、手を握つたり、女にしがみついたりすることは行儀を知らぬガサツ者の振舞で、堅く御法度になつてゐる。更にまゝならないのは、この部屋は二人きりとはいひ條、實際には両親の目がまだ光つてゐるので、両親の部屋からは、覗き穴があつて、中の様子を見ることが出来る仕掛けになつてゐる。おまけに両親はさぶる無遠慮で、壁をへだてた向ふの部屋で、聞えよがしに、大聲で男の品定めなどを露骨に語り合つて、婿曳の若き男女の心膽を寒からしめることがしば／＼ある。

また許されたる婿曳の時間は、極めて短かい。時分はよしと見れば、戸外に待つてゐるクラブの僚友が、なさけ容赦もなく、「歸れ！」の合圖をする。それは、女の呼び出しの合圖と同じく、空咳きをすることもあり、また露骨に聲をかけることもある。この合圖と同じ時に、まだ二人の話がつきず、用件がすまないでも、つきぬ名残りを後にとどめて、若者は惜しい別れをしなければならぬ。これがビルマの比較的上流社會における、男女密會

の風習である。

恵まれたビルマ娘

ビルマの有産階級の結婚は、多くその両親によつて行はれるのが普通である。この國ではマヌの法典に従つて、女は他の物品と同様に、一種の動産であると考へてゐるので、結婚は一種の賣買の意味を充分にもつてゐる。

そこでいよく結婚となつて、第一に問題になるのは、結納金即ち花嫁に對する價格の問題である。その價格の折合ひがついて、花婿の両親から花嫁の両親に對して、相當な金銭が支拂はれる。この取引が済むと、すぐに結婚となる。

ビルマでは、賤落や出来合ひ夫婦は、正式な結婚法として認められないが、實際は、私通もまたやがて許さるべき性質のものになつてゐる。つまりビルマには、野暮な両親はあまりたんとゐないので、娘たちは自分で自分の夫として、好きな男を選びとれる自由を與へられてゐる。この點でビルマの娘は、世界中で最も自由を與へられた人種といふことが

できる。

またビルマでは、結婚すれば妻の財産は妻の財産、夫の財産は夫の財産といふ風に、ちやんと率^レがきめられてゐるので、夫婦の間に財産争ひや、財産にからんだ紛争は起らない。

公然と第二號を

結婚は一種の民衆的祭禮のやうになつてゐて、披露式が殆んどその全部を占め、所謂本當の結婚の式はあまり重きを置かれてゐない。

當日、娘の両親の家に花嫁の席が設けられ、親類全部、友人知己をのこらず招待して、盛大な祝宴を催すだけである。三々九度の盃は、極めて簡略で、占星術師が二人の結婚成立を宣告すると、花嫁花婿は互に手を取り合ひ、一つ皿に盛られた米の飯を二人して取つて食べるのである。これが土地の主だつた部落の長であるとか、或は何か野心を抱いた家の結婚式であると、その式もすこぶる大袈裟に行はれ、儀式も、宗教的に僧を招いて盛んな讀經をやり、僧は花嫁花婿の手と手を木綿の糸でつなぎ合せ、兩人の頭の上から水

をそゞぎ、或は薄い絹布を引き裂くといふやうな、こみ入った儀式を行ひ、長々しい合唱等をやる。しかしこれを要するに、ピルマの結婚式に普通最も大切なことは、花婿の両親が花嫁の両親に對して、莫大な結納金を手渡しするといふ納采の式である。離婚はすこぶる双方にとつて容易なことで、不服ならば妻からも離婚を要求する権利がある。

お互に兩立した二人である以上、お互の性質に相違のあるのは當り前の話である。これと見込んだ男でも、さて結婚して見ると氣の向かない性格だったり、一見働き者に見えて案外になまけ者で仕事をしなかつたり、或は結婚の後に病身になつて始終ぶら／＼してゐなければならなかつたり、或はまた不幸にも災難に逢つて夫が跛になつたりした場合に、立派に妻から離婚を申込む権利がある。その反對に貰つた妻が全然子供を生まない女であるとか、子供は生んでも女腹で男の子を生まぬとか、或はだらしがなくて金棒引きであるとかいふ場合には、男の方でもそれを立派な離婚の理由とすることが出来る。

總じて夫婦の關係はすこぶる呑氣で、夫は妻が男の子を生まなくても離婚を望む程でない場合には、妻は妻としてそのままに同棲し、その代りに自由に第二號を作つてよい。し

かもその第二號は、當の第一夫人が選ぶのが習慣になつてゐる。かういふ有様であるから、ピルマには不幸な結婚といふものは、殆んど無いと言つてよい位である。ピルマでは一般に女が金儲けが上手でおまけにすこぶる精力家で、生計の方の心配も夫と同様にするので、離婚問題は多く女から持出されるのが普通である。ピルマ人が夫婦づれで歩く時は、女の方が二三歩夫に後れて歩き、觀劇の様な公開の席に坐る時も、女は夫の後に坐るのが禮儀になつてゐるが、何事につけても、どうしよう、かうしようといふ決定は、妻の方のお聲掛りで定るのである。

結婚初夜のいたづら

結婚當夜には、田舎の地方では、村の若い者共が新婚夫婦の家の圍りに集つて、その屋根に石を投げる風習がある。この嬉しき破壊行爲は、しかし數ルービーの金で即座に購ふことが出来る。この襲撃は、最初の見幕はすこぶる物すごく真にせまつたものがあるが、氣をきかして、關係者が祝儀のチップを渡してやれば、すぐに退散するといふ他愛のない

ものである。

この風習はすこぶる古いいはれをもつものと思はれる。即ち世界の始めに、五人の男と四人の女があつた。この男女はやがて四組の夫婦となつたが、とりのこされたのは可哀さうな一人の男である。彼は淋しさを壓へることが出来ないで、嫉妬のほむらを燃しつつ、幸福な四組の夫婦が、鴛鴦の契りの夢まどかなる新婚夫婦の家の屋根に石を投げつけて、せめてもの胸のむしやくしやを晴したといふ。これが後の世までも残されたのであらう。

花婿を盗む

同じビルマのシャン人の結婚風俗は、ビルマ人のそれと殆んど同じである。これまた同じく自由選擇によつて配偶者を選び、配偶が定ると、早速結婚が行はれる。しかし地方では非常に多くの種族があつて、これ等の種族の間に行はれる結婚風俗は、かなりいろいろ様々である。或る種族では結婚は血族關係の間のみ行はれ、以外の者の間や、異種族または異人種の間においては許されない。

これと正反對なのはチン族で、この種族の間では異族結婚が實行されてゐる。即ちこの人種の結婚は、同種族或は同村或は同部落等の者の間には許されず、他の全く知らない地方の人種との間に婚約を交へるのが、一つの法則となつてゐる。およそこれら各種族の中で最も結婚規定のきびしく喧しいのは、バンヤン・カレン族で、村内の極く狭い範圍以外の者とは結婚は許されない。この規則のもとに州の役人がきびしく監督してゐるので、一年に一組の結婚が見られるのがせいゝである。結婚の下相談が出来ると、村の酋長はそのことを一々州長官の所へ報告する。すると州長官はお役目御苦勞様にも、野越え山越え山間の僻村にお出ましになり、二人の候補者の首實験をあそばして、許可不許可を決定するのである。

村の結婚式には、これまた盛大な祝宴を張る。カレン族は元來が大酒飲みの種族で、酔つたまぎれにいろいろな悪戯をする。驚いたことには女だてらに酒を食ひ酔つた村の婦人達が、興にまかせて勿體なくも花婿様をかつぎ去つてしまふことがある。そしてまた家の女達は、一方花嫁御寮を晴れの寢床につれ込んで、喜び騒ぐのはよいが、そこでまたま

た花嫁様に酒を無理無體に悪すゝめして、酔ひつぶれさせてしまふやうなこともする。

また他の種族の村では、或る一定のグループの住民の間にのみ結婚が許され、そのすべての認知は村の長老によつてなされ、その後には例の亂痴氣騒ぎが行はれて、この祝宴は飲んだくれのお祭となるのである。ビルマ人は、男のみならず女もまたすこぶる飲酒に練達し、離乳の頃から即ち物心のついた子供の頃から、酒を飲むことに馴らされてゐる。それは丁度幼少より、葉巻煙草を吸ひ習はされてゐるのと同じである。かゝる結婚式においては、新しく出来上つた夫婦は、夫方の部落と妻方の部落とに、お互に恨みつこのないやうに三日三晩を過すのであるが、ここにこのことを見とゞける看視人が一人選ばれる。そしてこの三日三晩が無事に済めば、二人の仲はしつかり結びつけられたものと認められるのである。

獨身者クラブ

カレンの山地にある村々では、村端れに一軒のバラック建物があつて、年頃になつた獨

身青年をこれに收容することになつてゐる。この收容人物の年齢には制限がなく、中にはもうすつかり胡麻鹽頭になつたオールド・ボーイも混つてゐる。これ等の獨身者は、いづれも一種特別の装身具をつけて、一見してそれが獨身であることが分るやうにしてある。

たとへば堅果または寶石で縁飾をした貝殻ジャケットを着たり、色石やビーズ等の首輪を掛けたりしてゐる。また猪の牙を對にして胸にかけたり、耳朶に大きな銀筒をはめ込んだり、またある部族では木實の殻や白鷺の羽毛を飾りつけたリボンを掛けてゐるものもある。

これ等の獨身者が結婚した場合、さういふ飾物は一切妻に與へられる。獨身青年と獨身女が相會ふのは、大抵收穫期ときまつてゐるやうで、従つて結婚もまたこの時期に執り行はれる。この收穫期以外に、男女が密に密會したり會話を取り交すことは、あまり香しいことゝはされてゐない。

この獨身者の寄宿舎は、カレン族の外にルシエイクキ族、カチン族等に見られる。しかしカチン族では、やはり獨身者の小屋があるが、その小屋は小寢室のやうな型式のもので、各々別々の雜室のやうに分立して建てられ、同棲生活の試みを望む一對の志望者には、申

出によつて貸し與へられるものである。

この試練的同棲生活には、別に期日の制限といふものはなく、同棲の男女が結婚の適當な時期を見出すまでは、いつまでも自由に棲はせておくのである。カチン族の婦人は、結婚前においてかくの如き自由の試練の機會を與へられてゐるので、一度結婚した暁には、他の獨身者に對して、模範的な夫婦生活を示すことを要求される。それは要求されるまでもなく、また自然の勢ひとして當然なされべきことで、この充分なる結婚前の經驗によつて、結婚生活はすべて完全なものとなるので、従つて正式に結婚したのち破婚するといふやうな不幸は殆どあり得ないのである。

ビルマの地方部族はいづれも結婚を宗教的の儀式としないのであるが、このカチン族のみが宗教的儀式として結婚を取扱つてゐるのも一つの奇である。

駈落の合圖

カチン族およびブロング族の中には、また掠奪結婚も行はれてゐる。前述のごとくカ

チン族が、配偶選擇に理想的な自由を與へられてゐるにかゝはらず、無分別なる子女の中には、この結婚試練の時期を待ちきれずに、非常手段に出る者がすくなくない。

女が好きな男と駈落を決行する場合、彼女はまづ自分の保管する煙草を一纏めに荷作りをし、次に若干の米を自分の寢具に包んで、この二つのものをきちんと自分の部屋に残して、両親の家を抜け出す。この荷作りは、即ちビルマ娘の駈落の遺書のやうなもので、家族の者がもしも娘の部屋にこの形跡を発見し、娘の姿が見えなくなつたならば、正にその娘は思ふ男と手に手を取つて、駈落したものと判斷してよろしいのである。

實家を抜け出した娘は、謀し合せた場所で情人に會ふが、男はすぐにその女をつれて自分の親類の家に行き、娘をそこにあづけて自分は自分の實家に引き返し、我が両親に事の仔細を打聞ける。そこで次の日、男の両親は娘の両親を訪問する。さうして親達の間には、娘の身代金についての折衝が始められ、適當の値段で折合ひがつけば、ここに若き二人の結合が許されるのである。なほカチン族では、従兄妹同志の結婚が非常に賞美される。しかし、同姓間の結婚は忌まれる。にもかゝはらず、兄が死んだ場合、その妻子を獨身の義

弟に譲り渡すことが盛んに行はれる。そして譲り渡すべき男兄弟があるにもかはらず、その兄弟の妻子を他人に渡すといふことは滅多にない現象で、それはただ、次ぎ次ぎに譲り渡された兄弟がいづれも死に、あまりに同じことが繰り返される場合に限る。

オーストラリア土人

氏索性を明かに

オーストラリア土人の結婚制度は、その親類関係を見るとよくわかる。割合に進歩した社会では、最近親の場合を除いては、結婚は親族の間に於て結ばれる。オーストラリアでは、親族関係は日常生活で最も重大なものである。總ての社会生活は、親族関係によつて規定されてゐる。土人達は一つの血族的集團を、記憶の中にもつてゐるので、年長の男女を檢討することによつて、五乃至六代にわたる民族の系圖を作り、各人が各々他の人間に對する血族関係を明かにすることができる。

一般の法則として、一つの種族はただわづかに、數百人をもつにすぎない。それらの數百人の一族が、互に交配して各個の家族を作つてゐるので、その近い先祖の關係を發見することによつて、一つの種族または他の種族の人々の間に存在する直接或は間接、または近親或は遠親であるか否かを知ることが出来る。土人達が他人に對する行動はこれらの親族關係によつてきめられるのである。一人の人がその父の兄弟に對する義務は、その母の兄弟或は父の姉妹の夫に對する義務その他とは、全々種類を異にする。

かけはなれた土地の別種族から來た他人、或は隣種族等が初めて或る種族の住居を訪れた時、その第一にせねばならぬことは、その部落に住む見知らぬ男女に對する、彼の親族關係の發見である。住居の前に坐つてゐる一老人は第一に彼に向つて、彼の兩親や祖父母について尋ねるであらう。そしてその親族話がおたがひに腹藏なくすめば、つまり新しくやつて來た客人と訪ねられた種族との親族關係が明瞭になれば、そこで初めて新來の客は、その住居に入ること許されるのである。

オーストラリア土人はその親族關係を表示するために、特別な言辭をもつてゐないやう

ある。それは必要がないのではなく、不可能なことからしい。

彼等は、われわれが父の兄弟の子即ち甥とか姪とかいふやうな、簡単な言葉で異つた親族関係を言ひ表す方法をもたない。彼等はふつう親族関係の、言辭上の分類系統と呼ばれるものを用ひてゐる。この方法は、ごくわづかの言葉をもつて、そのおびただしい異親族の種類を言ひ表はすものである。われわれはたとへば、祖父とか姪とかいふ、ある種の分類語を用ひてゐる。さうしてこの伯父といふ言葉は父の兄弟を指し、また母の兄弟を指し、あるひは更に父の姉妹の夫を指すのだ。

男はみんな「お父さん」

ところがオーストラリヤ土人の間では、このわれわれが伯父と呼ぶ言葉を彼等の親族の、もつともつと廣い範圍の多くの人々に用ひてゐる。かうして彼等は、一人の父に對する特別な稱呼すらもつてゐない。それは丁度われわれが一人の父の兄弟に對して、特別に一つの稱呼をもつてゐないのと同じである。しかしながらかれらは、父に對し、父の兄弟に對

し、母の姉妹の夫に對し、更に遠き多くの親族に對して、同時にあてはまるただ一個の言葉を用ひてゐる。そこで彼等が母を呼び、母の姉妹を呼び、父の兄弟の妻を呼ぶに、同じ言葉をもつてする。かうして土人は各々多くの父と母の稱呼をもつてゐる。そこでいきなり土人の中に入つた外國人は、その言葉の意味にしばしば迷はされるのである。たとへば土人が父といふから、それはかれの生みの父かと思ふとさうではなくて、父の兄弟の子に當る從兄弟を指してゐるが如きである。

かうなつてくると、土人はかれ等自身の父母と他の男女との區別がつかないのではないかと思はれるのであるが、それはわれわれが父の側の從兄弟も母の側の從兄弟も、同じやうに從兄弟と十把ひとからけにいふのと同じで、別に混同してゐるわけではなく、自から言葉は同じでも、その内容には區別がついてゐるのである。そこで同じ父と言つても、その父といふ言葉の内容には、幾多の遠近疎親があり、その最も近い關係にあるのが即ち事實上の父で、父方の血族はたとひ五等六等の遠い親類でも、これを父なる言葉で總稱するのである。多くのオーストラリヤ人種に於ては、個人的の名前は一つ乃至二つもつてゐる

が、その名前は互に呼び掛けるものとしては、實際には用ひられてゐない。それ故、ある一人が他の一人を呼びかけようとする場合には、「お父さん」と呼ぶので、「武雄さん」と言つたやうな、固有名詞を用ひないのである。

オーストラリヤには、かういふ親族関係の分類が二系統あり、その系統は各々また多くの區分をもつてゐるが、さういふ詳細はしばらく措き、要するにかれ等はその親類を呼ぶに、一種の集團的な名辭を用ひる、即ち分類系統をもつてゐるといふことを述べるにとどめて措いて、その結婚制度についてしらべて見たい。

厄介な嫁選び

結婚の血族関係の、もつとも簡単な系統からいへば、一人の男が結婚を許される女子は、かれの母の兄弟の娘、もしくは父の姉妹の娘に限られてゐる。これらの関係にある相手は、同等のものと認められる。

かくて一人の男はかれの第一従姉妹と結婚し、あるひはそれと同等の相手と結婚する。

しかし同じ従姉妹の中でもかれが結婚を許されないものがある。それは父の兄弟の娘もしくは母の姉妹の娘に當るものである。これらの女達はかれが一樣に「妹」と呼びなす一團であつて、その一團の妹の一人と結婚することは、これ即ち眞實の實妹と結婚するに同じく悪徳なりと考へられてゐる。それがたとひ如何に遠き血族関係にあらうとも、依然として妹であり、かの女と結ぶことは、近親相姦を實行することになるのである。

更に複雑なる關係、オーストラリヤ土人の多くの間に存する結婚の法則の複雑なる關係を述べれば、一人の男子はかれの母の母の兄弟の娘の娘、あるひはそれと同等の位置にあるものとのみ、結婚することができる。この場合には、かれの第一従姉妹との結婚は許されず、かれの第二従姉妹の内から選擇すべしと、制限されてゐる。第一の系統において、男はかれと同姓の女の一半に對して、その妻の選擇を制限され、他の一半の女はすべて、かれの妹となるのである。第二系統においては、かれの同世の女の四分の一に對して、その配偶選擇をかぎられてゐる。これは第二系統において、種族は多くの親類に分たれてゐるからである。

グロ民族アングマン人

南海の原始人

アングマンとニコバルは、地理的にいへば、ベンガル灣にあつて、ビルマのネグレイス岬からスマトラのアチン岬に向つて、およそ七百哩の長さに亘つて横たはる、美しい熱帯の二つの群島である。

この二つの群島は、統治の便宜上、印度帝國の一地方廳によつて、治められてゐる。しかし、地理上から言つても、人種學上から言つても、この二つの群島は全然連絡のないものといふことが出来る。

アングマンのブレイヤ港には、印度帝國の流刑場がおかれてあり、あの世界に有名な印度における革命の罪囚が、一萬六千人からも集められてゐる。その他この地の住民は、矮小の裸番として知られる、最も下等な黒色ネグリットである。

一方ニコバルには、亞細亞大陸の南東隅から來た、體軀の大きな、美しい、半文明の移民が住んでゐる。この人種は、印度支那人種と系統を同じくするもので、特にマライ蕃人に共通した性質をもつてゐる。それ故このアングマン人とネグリット人とは、全然その容貌においても、風俗においても、また宗教意識においても、何等共通の點はなく、またかつて相交通し合つた形跡もないのである。

アングマン人の面白い點は、その人種の開化状態が、全く原始的の未開状態にあることである。彼等は何等の、いやしくも文化と名けらるべきものの、影響を受けてゐない。言はばこの世界に、人間の文明といふものが發生しない以前に存在したものと、生きたる天然記念物の一つである。かるが故に、この人種の考へることや、その振舞は、なにもかも面白いことばかりである。

彼等の慾望を表はす方法や、自分達の考へを表現する形式はすこぶる原始的で、文明人が、言葉の通じない異國人に對してする表現形式とは、何等相似たところがない。吾々はこの人種を通して、全然教育を受けない人間といふ者がどんなものであるかといふことを

知ることが出来る。彼等の成人は、實に文明人の十歳乃至十二歳の小兒の有する智力しかもつてゐない。

このアンダマン土人は、火を保存することは知つてゐるが、火を發生させる方法は知らない。また農作物を栽培することも、動物を飼ふことも知らない。鳥を食用に供することも知らなければ、釣鉤をもつて、魚を釣ることも知らない。また数を數へること、字を書くことは無論、いかなることに記録を残すといふ方法を知らない。つまり、すべての觀念が摸綯として、不正確で、不決定である。

子供のやうな大人

彼等は、たとひいかなる場合でも、即ち敵と戰ふ場合においてすら、身の安全を豫防し、または未來に對して、警戒する考へをもたぬ。また靈的なものに對する崇拜は、何等の形においてもなく、超自然的な力に感へて祈るといふ心ももつてゐない。ただ、たとへば自分の生んだ子は、自分のものであるといふやうな、所有權のごく初步の觀念は多少あるやうであるが、統治の觀念はまるでない。

しかしながら、アンダマン人もまた、人間である。獐猛な動物に對しては、普通の文明人以上の優れた智識をもち、また、その文化の程度においてははるかに優れてゐる文明人と共通に、多くの性格をもつてゐる。彼等は社會生活上の行爲と習慣とについて、或は彼等の製作する物品の形式と裝飾についてのみ、ただ一つの法則を知り、これだけは説明することが出来る。

果物を除いた外の食物は、皆調理して食用に供し、それらの食物に熱を加へることに苦心する。彼等は時に住居のための小屋を作ることでもでき、弓矢を作ることとはかなりたくみで、纖維や草で編物を作るとは、むしろすこぶる上手である。また水上の交通機關として、大形のカヌー即ち獨木舟を、大きな材木の幹を削り抜いて作ることが出来る。また時としては、土製の壘や鍋を獨創的に作り、それ等に特殊の圖案さへも施すのである。

このアンダマン土人は、少年時代には、すばらしい智力をもつてゐるのであるが、その智力が頂上に達すると、それで智力の發達はぶつりと止り、一生の間その少年時代のまゝ

で終るのである。彼等は極めて強い記憶力をもつてゐるが、その記憶力はすこぶる持続性を缺き、一度記憶してもすぐに忘れる。そしてそれを無理に記憶させようとすると、智力がすぐにつかれ、精神訓練を與へると、すぐに身體の健康をそこねてしまふといふ、はなはだ厄介な脆い性質をもつてゐる。

彼等は見知らぬ者に對しては、非常に疑ひ深いが、しかし親切である。けれども惜しいかな、恩知らずであり、隣人または同僚に對しても、はなはだ用心深く、おまけに眞似好きである。彼等はすこぶる輕薄で、虛榮心が強く、そのためにはするぶん、いろんな骨折りもし、また我慢強く、いつまでも浮身をやつす。教へれば、とりとめのない遊戯や、日常の遊び等がある程度までおほえ、またさういふことが好きである。

めくら、蛇に怖ぢず

迷信は未開人にお定まりの、はなはだ強くて、そのために他愛もなく喜んだり、不注意になつたりする。また萬事につけてまことに不用意で、たとへば水のない熱いところの長

旅にも、水を蓄へる用意を忘れるやうなことが屢々である。

彼等は打見たるところすこぶる元氣はよいが、眞の勇氣はもつてゐない。彼等の勇氣は、盲人蛇に怖ぢず式の、危険に對する無智と無評價とから來る猪勇である。彼等はまた利己的であるが、割合に胸がひろく、どちらかといふと俠氣に富み、名譽心に富んでゐる。性質は氣短かで、向つ腹立で、性急で、怒れば子供の如く手におへないが、同時にすぐ忘れてしまふといふさつぱりしたところがある。またすこぶる感激性に富み、動作は生々してゐる。特に上機嫌の際は、それが著しい。

一般的にいつて、アンダマン人はお互にまことにおだやかで快活である。特に老人や弱い者や無力な子供等に對してさうである。また妻に對しては深切で、子供達を自慢にするくせがあり、むしろ可愛がりすぎる程である。しかし怒れば、その溫和な性格はがらりと一變して、惡魔の如く残忍な兇暴性を發揮する。つき合つてゐると、すこぶる明るい友人のやうな感じのする民族で、すこぶるおしやべりである。

狩獵に出る時は獲物の追求にすこぶる熱心で、鋭いスポーツマンらしさがある。そして

年をとるにつれて、性格が頑固になり兇暴になつて、喧嘩好きになる。男も女もさしてかはりはないが、どちらかといふと一般に女の方が智力の上ではすぐれてゐるやうである。そして老年に至つて、相當の精神力を發揮することが、しばしばあるのである。

このやうな人種であるから、その家庭的の風俗等も、きはめて單純な幼稚なもので、宗教といへば、汎神教的な最も單純な形式のものといふことができよう。それも、祖先の亡靈とか、樹木や、海や、病氣に宿つてゐる悪靈等に對する、ごく朦朧たる恐怖といつた程度のものである。

怖しい風の神

この土人がもつてゐる、たつた一つの信仰に價する神がある。それは風の神で、その神には妻もあり子もあり、それ等の家族が、いつも主神の命を傳へる使者となつてゐると信じてゐる。この神はアンダマンの最も高い山の頂上に棲んでゐたものだが、今は空に棲むと信じられてゐる。またこの神は、他のいろいろの悪靈に對しては何等の權威がなく、た

だ自分自身に對して無禮を働くものを悪靈達に指摘すること満足してゐる。この神を怒らせるのは、叢林に育ついろ／＼の産物を損傷することである。そこで土人達は叢林の生物に對しては、ごく單純な警戒の掟を守つてゐる。

アンダマン土人は、彼等が火を運ぶのは、樹木の精靈を追ひ拂ふためであるといつてゐる。彼等は自から、太陽と月に對して崇拜の念をもつてゐるものと見え、日の出、月の出には靜に黙禱を捧げる。風の精靈を追拂ふためには、ばち／＼と音を立てて燃える樹の葉を燃したり、蜂の巢を焼いたりする。風の神はこの臭ひが、大嫌ひだと思つてゐるのである。彼等はまた月蝕には、弓の弦をぶん／＼打ち鳴らし、月をからかつて遊び戯れるが、日蝕には、一種の怖れを抱いて口をつぐんでちつと靜かに眺めてゐる。彼等は悪魔や悪運をさけるために、油や泥で體に入墨をする。

妻の骸骨を首にかけ

アンダマンのもつとも重要な儀式また祭禮といふべきものは、死に關するもの、即ちお

葬ひの哀悼である。アンダマン人は、幼児の死體は、両親の小屋の床下に埋める。成人の死體は浅い墓に埋める。或は、これは一つの名譽となつてゐるが、死體を一つの包みに荷造りして、一種の臺または木の上に載せ、その周圍に竹の葉の花輪等を飾りつけて、およそ三箇月の間も曝しておく風がある。服喪の風俗は一種特別のもので、縁者はその近親に不幸のあつた場合には、灰色の粘土を顔に塗り、舞踏のやうな陽氣な遊びを慎んでゐる。さて數箇月間臺または木の上に曝しておいた死人の屍體は、雨風に曝らされて、すつかり白骨になつてしまふ。するとアンダマン人はこれをよく水で洗ひ上げ、適當の大きさ、または形に碎いて、裝飾物に作り上げる。

この人骨裝飾物は、死人の好箇の記念物となるばかりでなく、これがまた一種の病氣の治療物となるので、病人の患部にこれを當てると、痛みまたは患ひが立所に治癒するといはれてゐる。遺骨の中でも、さすがに頭蓋骨は一番大切なもので、これは特に死者の遺族のうちでもその配偶者、即ち死者の夫または妻、獨身者ならば、もつとも近い縁者が身に着けるので、それは頭蓋骨に紐を通して、首に掛ける。哀悼の期間即ち服喪の期間もほほ

一定され、その期間が明けると、所謂忌明けの舞踏會を催し、頭部や、顔に塗つた泥土をこの時に初めてはがすのである。

グロ民族の結婚

アンダマン土人は、このやうな未開の人種ではあるが、その結婚制度は純然たる一夫一婦制である。さうしてその結婚式はすこぶる簡單で、何等宗教的の意味をもつてゐない。また、いやしくも子供が一人生れたならば、決して離婚といふことを行はない。一夫多妻、或は一妻多夫の如き制度は、絶対に存在しない。結婚後の不品行は、男女共に、同族の間からひどく非難され、時にはそのために、私刑的に殺害されることも少なくないのである。

更に結婚以前において、双方が結婚し得る見込のあるといふ範圍内で、異性間の交際は公然と許されてゐる。また家族生活に見出される最も目立つた風俗は、各家族間の子弟間における養子縁組で、子供達は早くから身を定めるために、六歳乃至七歳の子供で、その

両親と共に生活してゐるやうな者は極く稀である。

南洋土人のエロ生活

女も男も素裸で

メラネシヤといへば南太平洋に横はる一大群島、その中にはフィジー群島を初め、東南から北西にかけて、ニューカレドニヤ、ロヤルティ、ニュー、ヘブライズ、バンク・アイルランド、サンタ・クルーズ諸島、ソロモン諸島、ビスマーク群島、アドミラルティ群島、ニューギニア等の諸島が含まれてゐる。

何しろ大陸に遠い大海の上にとび散る島々である。そこにはわれわれ文明人には、想像もつかぬやうな變つた人間生活が行はれてゐる。諸事万般、すべてこれエロとグロならざるはない。赤裸々な熱帯土人たちの原始生活、巧まざる彼れ等のグロ生活、エロ生活、そこにわれわれは、思ひもよらぬ自己の姿を見出すやうなこともあるだらう。そこが筆者の目のつけどころ、ちつくりと讀んでいただきたいものだ。

いつたいメラネシヤ人は、いはゆる黒色人種で、どす黒いチョコレート色の皮膚をもつた人間、身長は五尺四五寸で、髪はちぢれた黒髪、肌がこまかくて、エロ黨には絶好の肉體の持主である。

風俗は島々によつて自ら異つてゐるが、概して男は、一絲もまとはぬ素ツ裸で、どこでも押し歩くといふ身軽さ。たまに身に着けたものといへば申譯のやうな腰巻か、或ひは〇〇〇〇〇〇をかくすだけの裸一貫。女もこれと大同小異、氣のきいたのは布ぎれの、多くは木の葉をつづり合はせた短かい腰巻をぶら下げるか、或ひは姫御前のあられもないといふやつだが、男と同様の、ソレ例の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を隠すふんどしを締めこんで、まツびるま往來を歩いてゐるといふエロ振りなのである。

いやいや、處によつては、その一片のふんどしすらもない。それこそ生れたまゝの眞ツ裸。乳房もなにもまるだして、嫁入前の花はぶかしい娘子が、のさりのさりと歩いて暮らす、かけ値なしの素ツ裸の生活をしてゐる人間がある。

ではかういふ隠しどころさへ丸出しにしてゐる飾り氣のない人間たちだから、身につけ

る飾り物などは一切用ゐないだらうと思はれるが、さにあらず。かれ等は着物も着ず禪もしめなくせに、頭かさりや頸飾りだけはつけるのである。げにや、「頭かくして尻かくさず」どころか、尻も前もさらけ出しのまツばだかでありながら、耳環や首環にうき身をやつすといふのだから、こいつは確かにグロである。

さてそのすツばだかの彼れ等が、色氣を見せる身の飾り？ はまづ鳥の羽毛の髪かさり、貝殻や犬の牙、珠數王、乾果などの頸かさり耳環である。そのほかに鼻へも飾りをつける。飾帯紐を巻く。腕環をはめる。脚環をはめる。踝にまで環飾りをする。その材料は、麥稈眞田から、樹の皮、貝殻、織物等、更に花や美しい色合の樹の葉などは、むろん彼れ等が、喜んで身の飾りにするものである。

誰に見しよとて紅鐵葉つける、はだかではだして暮らす彼れ等でも、男は女に、女は男に、惚れて貰はう愛されたい、ただその一心でやることなのだ。

エロ裝飾、娘の入墨

これ等の島々の土人たちは、われわれが意匠さまさま、色とりどりの柄の着物をきるやうに、着物がなから、その素肌の上にいるいろいろの刺青を施す風習がある。島によつて男も女もやる場所があれば、女だけやる場所もある。

この刺青は、多く男女とも春機發動期に達して、いつでも立派な結婚ができるやうになつた時にするので、特に女においてさうである。丁度年頃の娘が、こつてりと高島田に結上げて、催促めかしく抜き衣紋をして歩くやうなもので、まづ一種の求婚ポスターをからだへちかに彫りつけるのだと考へればよろしい。或る島では、この刺青がまた結婚の一種の必要條件になつてゐる。

この刺青はしかしエロ的裝飾のためばかりではなく、時としてはその部族のしるしとして施されることがある。つまり大きな放牧場で、その牧場の牛や馬に焼印を捺して置くやうに、或る部落の土人は、みんなその部落のしるしになる一定の紋様を、からだに彫りつけるのである。

このほか部落において功勞のあつた者、或ひは部落における名譽の表彰をうけたものは、

それぞれその名譽を現はす特別の刺青をすることがある。むろん刺青だから一生残るので、これは生きてゐる肌はだに、ぢかに勳章くんしょうをほりつけられるのだ。またこの刺青のかはりに、男も女も、部族を現はす切傷きりきずをからだにつける土人もある。聞くだけでも凄あさましい話だが、一生抜けないやうな疵痕きずあとを残す切傷をからだにつけるのである。

次は鼻飾りであるが、これがまた世にもグロテスクきはまるものである。丁度牛の鼻に環わをはめるやうな骨や貝殻かいがらをはめこむのである。丁度牛の鼻に環をはめるやうな骨や貝殻をはめこむのである。

耳飾りも同様、耳みみに大きな穴あなをあけ、これに骨の圓盤まんだんを作つて、丁度眼鏡のレンズのやうに嵌はめこんで、肉で縁ふちを巻きこましてしまふ。それをしない者は、耳みみを長く丸く引伸して、これに環わを吊るすのだ。

人間をとつて食ふことはメラネシヤ土人一行いっぺいに行きわたつた怖ろしい風習ふうじゆであるが、今では所によつてそれをやらぬ種族もある。それはヨーロッパ人が入込んで淘汰たうたしてゐるためであるが、さういふ教化けうかの行はれつゝあるところでも、永い習慣じゆくわんで、こつそりと人を殺

してその肉を食くふことがある。

面白いのはかういふ土人たちの間に行はれてゐる、いろいろな儀式ぎしである。殊に、出産、結婚、葬まうひの風俗が頗る變つてゐる。このうち、まづお産うぶの風俗から見物けんぶつして行かう。

奇天烈な男のお産

子を生むといふことは、いかなる野蠻人にとつても、一家の重大事件なのである。かれ等は最初さいしよ、ずつと大昔には、なぜ子供が生れるのか知らなかつた。われわれが子供の時代にそれを知らなかつたのと同じである。

しかし、だんだんと時を経るにつれて、彼れ等も子供といふものは、男女の或る〇〇行為によつて生れるものらしいこと、夫婦關係によつて出来るらしいことを知りはじめた。そして生まれた子供は、當然母親がその所有權しよいうけんを主張する。それは單純たんじゆんに、その子供を生むために、妊娠てんしんしたり、生うみの苦くるしみをしたりするのが母親であり、自分の腹はらから出たものだから當然たうぜん自分のものだといふ考へからである。しかし父親もまた自分の妻の生んだ子

供に對して、多少なりともその所有權を分けて貰ひたい。だが子供を生むについては、男は何一つ苦痛を感じないのだから、所有權を主張してもまるで問題にならない。そこで男は、女と同じやうに生みの苦しみをしたならば、生れる子供に對する所有權を、女と同様に主張することが出来るといふやうな、幼稚な考へを抱き始めた。

ソロモン諸島や、ニューヘブライズ、バンクス・アイランド等の島々の土人が、すなはちそれである。この島々の土人たちは、妻が産氣づくと同時に、その夫もまた「腹が痛い」「苦しい苦しい」といつて、痛くも痒くもないのに大騒ぎをはじめめる。そして産婦と同様に設けの産室に入り、産婦の聲に合わせてうん／＼呻る。それから一週間なり十日なりの間、尤もらしく産褥につくのである。これをクローヴェイド、即ち偽出産といふのであるが、この狂言の生みの苦しみをすることによつて、この土人たちは妻と同様に、その子に對する權利を勝ち得るのだ。はてさて馬鹿々々しいと思はれるが、これがいかにも尤もらしく、事實大眞面目で行はれてゐるのだから仕方がない。

いや産褥につくだけではない、出産の前後は胎兒や生れたばかりの嬰兒に害があるといつて、その夫もまた妻と共に食事を慎しみ、重い物をもつたり、骨の折れる仕事をしたり、海へ出たり、木登りなどをすることをやめる。まるで子供だましの振舞だ。しかし未開人は、子供よりも他愛のないものだといふことを考へれば、これもまた無理のない風習であらう。

産婦の介抱は？

出産に對する穢れといふやうな考へが、かれ等未開人の間にもある。バンクス・アイランドの風習などはその例で、この島の土人は、子供が生れて後一箇月の間、父親は子供に罰が當ると稱して、神聖な場所へ立入ることをしない。

迷信はなか／＼多いので、ニュー・ヘブライズ群島の土人は、子供が生れる七日乃至十日の後に、生兒の惡運を拂ふ意味で、神に一つの犠牲を捧げる。また或る島の土人は、生兒が十日になると、十日目にその父親は濱に出て着物を洗ふ。そしてもし男の子ならその

道筋に、小さい弓の玩具を落して行く。女の子の時には、榮蘭で編んだ蓆の切片を、道々に撒きちらして行くのである。これは男の子なら成長してよき射手になるやう、女の子ならこの土人たちの間で通貨の代りに使はれてゐる蓆編みが上手になるやうといふ、まじなひなのである。そしてもしも生兒が物を食べるやうになつてから死んだなら、その子の初めて食べた食品を、その両親は一生口に入れない習慣になつてゐる。

また、このニューヘブライズの或る島では、男の子が生れると、十日の間その父親方の親類の者たちが、産婦のたべる食物と蓆を引受けて運んで行く。十日目になると、父親はそれ等の親類の人たちに、お禮として食物と蓆を贈る。するとまたその親類たちは、蓆を子供の顔の上にかぶせ、子供の食料にする何匹かの豚を繋いだ繩の端を、蓆といつしよに子供の顔の上に置く。バンクス諸島の或る島では、初の男の子ができると、その母方の親類たちが、こぞつて賑々しく産兒の家へ襲撃の狂言をしてたづねて来る。そして唄つたり踊つたりするのであるが、この時生兒の父親たるものは彼れ等狂言襲撃隊に對して、豚その他の御馳走や財物を與へて、引取つてもらふのである。

武運を祈る

ビスマーク群島のガゼル半島では、貴人の家に初産があると一つの風變りな儀式を行ふ。これは一種の禁厭の式みたいなもので、先づ魔法使を招聘する。この魔法使は、貝殻を碎いて作った石灰の粉を、生兒の周圍四方八方に吹きとばして悪魔を拂ふ。またその石灰粉を母親の體軀にすり込み、母親の食物に魔除けのまじなひをする。

それがすむと今度は火を焚かせ、女の人に生兒を抱かせて、その火の煙の中を何度も潜らせる。その時魔法使は、生兒が男子である時は、「強くなれ、そして貨殖の道に長けよ。」と唱へ、「槍を投げよ、石を投げよ。」と唱へる。生兒が女兒ならば、「丈夫に成長せよ。そして野に出てよく働くのだよ。」と祈る。そこで魔法使は、焚火の灰を攪み、指でこれを生兒の眼、耳、顛頂部、鼻、口等に塗りつける。これは悪魔を拂つて、充分に生育するやうにといふ禁厭なのである。

同じくビスマーク群島中のニューブリテンの中央部では、一人の女が子供を生むと、村

の男たちは、てんでに木の枝を擔いで、村の集會所に集合する。そしてその枝を集めて、葉に火をつけバツバと燃やすのであるが、その時若い男連中はその木の枝の一部を折りつつて、みんなの頭の上に投げかける。すると人々はそれを一つ一つ拾ひ上げる。やがて一同の中の一人が、かねて用意してゐる薑荷をとり出し、これに咒文をとなへかけてから、その一片づつをみんなに分ける。みんなはその薑荷を受取つててんでこれを嚙り、それを今拾ひ上げた木の小枝に吐きかけて、火中にくべる。この儀式は子供の生誕を祝ふといふよりも、村の男たち自身の武運を祈る式であるらしい。かうするとその男達の戦場における勇氣が培はれ、かつ彼れ等の佩びるところの武器が、その威力を増すのだといふことである。

これも同じビスマーク群島中のニュー・アイランズでは、村に初産があると、村中こぞつての大騒ぎとなる。即ち全村の男と女がこの機會に二手に分れて、盛んな模擬戦を開始する。この戦において男の用ゐる武器は棒であり、女の武器は石その他の飛道具で、こゝに出産に際して端なくも男女對抗の一大血戦が現出するのだが、この擬戦がすむと、あと

は豚と野菜の馳走で、盛大な宴會となり、目出度く和解の式を閉ぢるといふ。

男子近寄るべからず

出産前後の産婦に夫の近附くことは、生れる子にもまた産婦にも大害のあることは、未開人文明人を通じて同じである。然らば本能に動き易く、衝動に堪へ克ちがたい未開人は、いかにしてそれを避けてゐるか？ これはなかなか興味のある問題。しかし土人達は頗るロマンティックな、また情味あり巧妙な風習によつて、これを防いでゐるから面白い。その一つの例は、ソロモン諸島の或る島で行はれてゐる風習である。

この島では妊婦の出産期が近附くと、村の女どもが寄集まつて、そこに共同の一つの勞作を始める。即ち彼の女等はずづ妊婦の家から少し離れた野原の中に、適當な藪を探し出す。そしてその藪の中に、木の葉で蔽うた一つの小舎を作るのである。この小舎を作るについては、彼の女等自身だけが手を下し、一切男の手を藉らない。小舎ができると、彼の女等は妊婦を、この小舎の中に連れて來て坐らせる。そして日々夜々こゝに食事を運ん

でやつて、この小舎の中でお産をさせる。その間、姪婦の夫は勿論一切の男子をこの小舎に近附けしめない。のみならず、産後少くも十四日間は、産婦と生兒をこの小舎に留まらせ、決して夫も他の男子も近附けないのである。なんと情味のある、氣のきいた亭主避難法ではないか。そしてこの村では子供が生れると、女たちだけで血噴き祭といふのをやる。

初孫見参

ニューギニヤのコイタ人は、なかなか味な初孫見参式をやる。生後三四週間たつと、生母生兒、いづれもすばらしい美装をこらして、母方の父母を訪れるのである。この時扈從者として父の妹が附添ひ、空の壺と、槍と袴と、火杖を引出物として持参する。

實家に到着すると、二人は座敷に坐つて、煙草を喫み、葡萄酒を嚙んですましてゐると、そこへ現はれるのは母の兄弟で、これが持参した壺その他の引出物を受取り、代りに同じやうな品物をそろへて、家への土産に持たして歸すのである。

同じくニューギニヤのメケオ地方では、村内の或る家に初兒が生れると、村人はその家

の近くに集まり、一晚中歌を唄つて夜を明かす。翌朝になると、生兒の父親はそれ等の村人たちのために、豚または犬を殺して彼れ等を饗應する。村人たちはそこで一大宴會を張り、ダンスをやつて踊りさわぐのである。但し村に最近死者があつた時は、この祝宴は取り止めになる。

女軍進撃

この南洋の諸島では、出産祝ひに女軍が摸擬的の襲撃進軍する風習が、なか／＼盛である。これは女の喜びを現はすためか、或ひは女の生みの力の偉力を強調する示威運動であるか、或ひはまた、男のために生みの苦痛を與へられる、腹癒せの示威運動かどうかかわらない。とにかく出産に際して、女がいきり立つことがはやる。

ニューギニヤの山地々方では、子が生れると村の女たちが隊を組んでその家を摸擬的に襲撃するし、クニ種族の間でも、女が初生兒を生むと、村の女共がその家に大學進撃し、クラブの家を襲つて槍を投げる。またマフル種族にもこの風習があつて、酋長の家に初生

兒が生れると、村の女たちはすべてダンスの時の盛装をして村内にくりこみ、手んでに槍と棍棒をふりかざして、その槍を酋長の家に投げつける。槍が屋根に突きささることも珍らしくない。この襲撃が終ると、酋長の家からは豚を殺して振舞ひがあり、一同そこで盛んな祝宴に移るのである。

亭主受難時代

トレス・ストレイト群島では、妻がひどい陣痛を催し、産前の苦しみが生かひどくなると、その亭主は大急ぎで海邊にかけつける。そして海の中に入って我慢のできるだけ長く水中に潜つてゐる。恐らくそれが数時間にも及ぶことがある。赤ん坊が「おぎやア！」とこの世の風に當るまで、つまり子供が生れ出るまで、水につかつてゐるのである。かうしていると、妻君の生みの苦しみが、するぶん減じられると思はれてゐるのである。

お産が長引く時には、禁厭者を招んで来る。この時禁厭者は、或る聖物を海の中に投げこんで祈りをあげる。また亭主が足の冷えきるまで海邊に佇つてゐると、お産が早くなる

といふ迷信も行はれてゐる。

お産の迷信じみた儀式はなかく盛んなもので、南洋諸島一帯にこの風習の行はれないところはない。ニューギニアの東端に近い某島では、初生兒が生れると、庭にその家族の表象物をもつて来て、一箇月以内に果實を結びさうなバナナの樹を選び、その木の一の枝の葉鞘の中にそれを置く。そして一箇月後にそのバナナが實ると、その果實を中心にして、御馳走を作り、母親の伯叔父たちを招いて祝宴を張る。それからまた一箇月ぐらゐして、三四回の祝宴が開かれる。この時には産婦の束縛されてゐた食物の自由が解放される。即ちこの祝宴で、はじめて産婦は何でも構はず食べられるやうになるのである。

ところでこの誕生期間に際し、その亭主即ち父親はなかなか嚴重な掟を守らなくてはならない。まづかれは子供が生れてから半年ぐらゐの間は、集會場に泊りに行く。そして最初の一箇月間は、産婦と同様にその亭主もまた食物の節制をしなくてはならない。この掟を破ると、生れた子供は病氣になると信じられてゐる。

また亭主は最初の一箇月間、絶対に生れた子を見ることが許されない。そして子供が妻

といつしよにゐる間は、絶対にその妻の側に近附いたり、側を通りすぎてもいけない。子供のからだに觸れるのは、生れて後五箇月乃至八箇月たつてからでないと許されない。もしこれを守らぬ時は、その家の繁榮が破られ、でなければ自分がひどい病氣になるといはれてゐる。

もう子供を抱いてもよいといふ時期になると、母親即ち妻君は、口には出さず、手頭と腕に貝珠の珠數をかける。つまりこれが長い間禁じられてゐた亭主が、妻子に近附いてよろしいといふお許しの合圖になるのである。と、かういへば頼るきれいであるが、實を割つて言へば、産褥にある妻のからだは恢復しきるまで、亭主の〇〇をさけるために作つた、いはば體裁のいゝ一種の亭主に對する妻君の避難法なのである。

双生兒の始末は？

嬰兒殺しの風習は、廣くメラネシヤ一般に行はれてゐる。まだ結婚をしない、つまり未婚の娘が子を生んだやうな場合には、その生まれた子供は必らず殺される。この地方は一

般に男女の風儀が亂れてゐて、未婚の娘たちがさかんに性を享樂するのであるが、私生兒を生むことだけは、やはりよいこととはされてゐない。未婚の女が子を産むことは、非常な恥づべきことであり、また親兄弟からはひどく憤慨されることである。所によつてはその戀しめのために、さういふ娘は殺される習はしになつてゐるところさへある。そこでかういふ私生兒は、むろん生れるやいなや、邪慳に、惜しめもなく殺されてしまふのだ。

しかし未婚の娘の私生兒だけではなく、立派に天下晴れて結婚した夫婦の間にできた子供を殺す風が、なかなか盛に行はれてゐる。それにはいろんな理由がある。或る時はその両親が、もう子供はいらぬとへる場合、即ち多産のための産兒制限の意味から、生れた子を殺すもの。または生れた子が自分たちの望んでゐたものでない時に殺すのがある。即ち親は男の子の生れるのを望んでゐたのに、生れた子が女であつたとか、その反對に女の子を望んでゐたのに、男が生れた場合などである。これはすでに生れてゐる子供の男女の釣合から來ることもあれば、また島によつて一般に男を欲しがらる島もあれば、女の子ばかり好きなところもある。つまりその土地々々の好みに従つて、生れた子を選択し、好みに

合はない者は殺してしまふといふ、するぶん勝手な亂暴な産兒制限を行つてゐる。

双生兒の忌み嫌はれることはいづれの國も同じで、野蠻未開の南洋土人の間でもひどく嫌つてゐる。そして、さういふ子供を生む母親は、豚腹だとか犬腹だとかいつて、侮蔑されることも同じである。また所によつては、双生兒はそれぞれ異つた父によつてできるものと信じられてゐるところもある。とにかく双生兒ができる、ひどく嫌つて、土人等はその一人はすぐに絞め殺してしまふのである。また不具な子ができても、それを殺すことになつてゐる。但し、蘭領ニューギニアだけは、不具の子は殺さない。そして、さういふ子は大きくなつてから、魔法使または巫女にする。

誰に見しよとて柔肌

結婚の風俗や儀式は、またこの南洋の諸島では、怖ろしく風變りなものである。

南洋土人の娘たちが華美を競つて試みてゐる入墨は、みなこの結婚に結びつけられた装飾であるといつていい。それは或る地方では、その娘が結婚期に達した看板ともなり、或

る地方ではもう縁談がきまつてゐる印にもなる。しかしまた場所によつては、入墨は全然結婚には關係なく、殊に結婚後の女子は全く入墨の必要を認めないところもある。

しかしまづ南洋土人に共通な一般の風習としては、許婚時代の娘、または結婚した花嫁は、その許婚時代か或ひは結婚後早々に、その婚方の家族が費用をもつて、入墨をさせるのが普通になつてゐる。で一般に、この娘の入墨は、その娘の家族にすれば、娘の値打に大きな役目をもつてゐるといふことになる。

入墨と共に、メラネシア一帶に廣く行はれてゐる結婚風俗の一つは、婚約ができると結婚前の或る期間、許嫁はその婚の兩親と同居する風習である。これは新嫁の氣質を知つたり、或ひは家風を呑込ませる上から言つても、なかなか面白い慣はしではなからうか。

お譲り結婚、父娘結婚

南洋の未開土人の間でも、同族結婚の弊害は認められてゐるので、女だけは必らず同族と結婚してはならないことになつてゐる。それで母系の方の同族結婚は絶対に禁止されて

ゐるのだが、それが一方に偏つて、或る他部族から来た妻の生んだ娘と、また別の他部族から迎へた妻の子供となら娶はせてもよいといふことになつて、事實上腹ちがひの兄妹が夫婦になつたり、父と娘が結婚するといふやうな、滑稽なことをやつてゐるものもある。更に、こゝに兄弟があつて、もし結婚後の兄が死んだとすると、その未亡人は當然その次の弟に譲られ、弟の妻となる。これは妻はその夫の家族に買取られた一個の財産と考へられてゐるので、その所有権は夫の死後といへどもその家族に残り、亡夫に最も近い近親が、順々にその生きた財産を所有する権利が認められてゐるのである。

効力テキメン惚れ薬

土人の若い男の間には、それ相當に戀に愛身をやつす者がなかなか多く、従つて惚れ薬を使ふものが多い。その惚れ薬は、ではどういふ種類のものであらうか？

ニューギニヤのコイタ人が用ゐる惚れ薬は、いもりの黒焼ではなくて、椰子の若樹の果乳に石英の粉末を浸したものを自分の顔に塗りつける。かうすると思ふ女が、向ふから自

然と靡いて來るのださうである。

それよりも少し凝つたものが、同じニューギニヤの他の某島に行はれてゐる。それはまづ或る樹の皮を粉にして、これを椰子の果肉に混ぜる。そしてこれをよく磨りつぶして木の葉の上に塗りつけて焙る。更にこれを搾ると若干の汁が出る。この汁を指す女が眠つてゐる時に、そつとその寝顔につけて置くと、數日を出でずしてその効果が現はれ、相手から猛烈に戀をし向けて來るといふのである。

ドイツ領ニューギニヤにも、數種の惚れ薬が行はれてゐる。こゝではこの地方に産する一種の燈心草を、妖かしの材料に使ふのである。この地方の土人は、地方特産の一種の煙草を木の葉にくるんで巻煙草とし、これを横笛のやうな恰好のパイプにはさんで吸つてゐる。で、年頃の青年たちは、この巻煙草を得戀の責道具に使ふのである。即ちまづこの巻煙草に、くだんの戀の魔力をもつと信じられてゐる燈心草を巻き込み、かつ自分のからだにも燈心草の液を塗りつけておいて、まづその煙草を自分で吸ひ、手づからこれを目指す相手の女に勧める。これをやれば、男の戀は必らず成就すると信じられてゐる。

この燈心草のほかにも、この地方に産する、堅い一種の棒子に似た果實をつける蔓草が、また惚れ薬として強い魔力をもつと信じられてゐる。そこで戀をした若者は、機會をねらつてこの蔓草の實を、思ふ少女に投げかけてから、せいぜい舌に馬力をかけて口説きかける。もしこの時に女がその草の實を見ない時には、もう一粒、今度はそれを娘の背中に投げつける。すると娘はきよと／＼あたりを見廻し、彼れの姿を見つけるにちがひない。すると木の實の効験がたちまち現はれて、その第一の印象で娘は投げた若者にすぐと惚れこんでしまひ、うまうまとこの戀は成就する。

今一つの誘惑法は、この地方に産する一種の黒とかげである。このとかげの尻尾を巻煙草にからみつけて、その煙草を目ざす相手に與へるのである。

誘惑袋

最後に、戀する相手の女に競争者があつた場合、この戀の競争にうち勝つまじなひである。これには或る草の根を用ゐる。この草の根をしほると、酸っぱい汁が出る。この酸つ

ぱい汁を、相手の女にふりかける。すると相手の女の心がたとひ當方よりもよけい、競争者であり戀敵である方の男に傾いてゐても、たちまちこちらに心を翻へし、術を用ゐた方の男の胸にすがりついて來るといふ。

また同じニューギニヤでも、マフルの山岳地方の青年は、「惚れさせ袋」とでもいふやうな、一種の小さい提げ袋を携帯してゐる。この袋の中には、或種の木と石の碎片を詰めてゐる。この碎粉は時を経るにつれて、携帯者の體臭をいくらか吸ひこんでゐる。で、機會到來すれば、この粉を煙草にすりつけ、自分のかんばしい體臭をまぜこんで、その煙草を戀する女に勧めるのである。若者によつてはこの「惚れさせ袋」を充分に熟させるために、ずむぶん永い間、氣ながに腰にぶら下けてゐてなかく使はない。しかし一旦使用したとなると、この袋の効果は、魔法使の魔法よりもはるかに効力顯著なるものがあるといはれてゐる。

前述のドイツ領ニューギニヤの或る海岸地方では、思ふ女をなびかせるために、若者は小さい曲つた木片で、その女の頬を軽く打つ風がある。これはしかし戀の魔法といふより

は、むしろ求婚の一種の形式である。

またマフルに歸つて、マフル地方の青年は、戀の相手を探す時にも、一種のまじなひまたは占ひのやうなことをする。それはまだ極く年の行かぬ時分に行ふので、わが國の昔、未婚の娘が丑滿刻に便所に入つて灯をともし、糞壺の中に映る未來の夫の顔を探したといふのに似た方法である。マフルの少年たちは、丑滿刻に便所へ入るかはりに、ごく日並のおだやかな、風のない時刻をえらんで、こつそりと一人で火を燃やす、胸の火をではない、現實の火をなのである。すると風はなくても、火の焔と煙はどちらかの方向に向つて、たなびくものである。マフルの少年はこの煙のなびく方角を、ちつと眺め入る。そしてその煙の流れる方向に従つて、自分の妻となるべき少女を探し求めに行くのである。

奥入れ前の身だしなみ

ビスマーク諸島のある地方では、娘が年頃になると、殊に婚約が成立すると、いよいよ三々九度の盃をとり交はすまでの數箇月間、蟄居生活を送る風習がある。この習慣は、ニ

ユー・ブリテンの中部地方にも行はれてゐる。

これ等の地方では、婚約のできた娘は、すぐに嫁入先の、將來夫となるべき者の兩親の家の裏手に設けられた、小さい小舎の中に引移り、そこで世間とは全く交渉を絶つた孤獨生活に入る。この許婚の蟄居生活中、許嫁の娘は非常に嚴格な飲食の節制をしなければならぬ。即ち許嫁は、一切の食物、一切の飲物、水までも自分の手で飲むことを許されぬ。といつて、絶食生活に入るわけでもない。それでは、この蟄居中の許嫁の食物はどうするかといふと、これはすべて許婚の夫の方の親族の、女たちが奉仕する。即ち許婚の夫の姉妹、叔母、姪などが、三度々椰子の葉の上に載せた食物を、この蟄居の小舎の中に運んで来て、養つてくれるのである。

無論この蟄居期間中には、親といへども、男と名の附くものは、娘に面會することは許されない。また娘自身も、氣儘に小舎から外に出ることはできぬ。やむを得ない事情で外出する際は、頭の先から足の先まですっかり隠して、人をさけるやうに、口笛をふきながら行く。一般の村人もまたこの習慣には馴れてゐるので、もしこのやうな口笛をききつけ

ると、廻り道をして娘と正面衝突をしないやう、道を避けて通るのである。これと同じ風俗は、ニュー・アイアランドでも行はれてゐる。こゝでは、この許嫁の蟄居生活の間は頗る長く、二十箇月にも及ぶ。アドミラルティー島にもこの習慣はあるが、これはニュー・アイアランドに比べてよほど蟄居期間が短かく、六箇月ぐらゐのものである。

土人にも虚榮

さて、それではメラネシアのこれ等の地方における、實際の結婚式の模様はどんなものであるかといふと、それは多く一種の賣買取引のやうなもので、結婚式といふ名に値するものは、殆どないといつてよい位である。そのごく稀なものの中で、特殊の儀式をもつてゐるものを擧げてみると、次のやうなものであらう。

ニュー・ヘブライズ群島の中の或る島では、結婚式の當日になると、村人がわんさくと、花嫁の家のまはりに寄り集まつて来る。すると、先づ花嫁の父親あるひはその友人が、この群衆に向つて、一場の挨拶の言葉を述べる。それが済むと、當日の花嫁が立つて、地

上に一本の龍木の枝を突き立て、數頭の豚と、食品と、新しい敷物を持出して来る。これ等の財物は即ち花嫁を購ひとる代價で、花嫁の親たちに提供されるもの、結婚者の貧富の差によつて、その額に多い少いの差がある。

この財物の授受が終ると、今度は結婚式の演説者が立つて、花婿に向ひ、新妻を裕福に養へとか、深切に可愛がつてやれとか、意地悪をするなどいふやうな、一場の訓戒演説をやる。そこでいよいよ、花婿と花嫁は手を握る。式はこれで目出度すんで、すぐに祝宴に移るのであるが、この際花婿はその花嫁の両親及び、司會者たる演説人の恩に報いるため、満腔の謝意を示すために、できるだけの見栄を張つた盛大な宴會をするのである。

掠奪結婚

ブリテイツシュ・ニューギニヤのメケオ地方にも、掠奪結婚の起原を暗示するやうな、一種特別の珍しい結婚風俗が行はれてゐる。その次第を次に述べよう。

まづこゝに、似合の娘と息子があるとする。双方の親たちの間に、あの娘ならよからう、

あの男ならといふことになつて、さて話は、ではどういふ風にといふところへ進む。その縁談の交渉は、ほかでもない、結納即ち娘を貰ふについての代償物の相談なのである。これについて双方の親たちの間に、いろいろと取引上の商議が行はれる。その結果、婿の親たちからは、ではこれ／＼の装飾品と、これ／＼の豚とを差上げようといふことになる。花嫁の親達も、それならばといふことになる。

話がこゝまできまると、この結納品の授受といふことになるのは普通であるが、この授受の方法が、この島の地方では、よほどほかと異ふのである。即ちおとなしく、靜肅に、結納物の受渡しをしない。話がきまつて後、娘の縁者たちの間では、ひそかに一團の武装隊を編成する。そしてこの武装隊が、或る夜を期して、婿の家へは秘密に、婿の家を襲撃し、豫め結納交渉で商議されただけの頭数の豚を、かつさらつて逃げる。即ち結納品の強奪である。

しかしこれは、普通の掠奪とはちがつて、約束の数の豚だけを奪ひ、ほかの物には一切手をつけない。のみならず、掠奪がすむと、すぐにかれ等の手で、晴れの衣裳に身を飾つ

た花嫁が、花婿の家のヴェランダに設らへた臺の上に、連れて来て置かれる。

この騒ぎの中で、花婿はどうしてゐるかといふと、これもまた風變りな、彼はおびえたやうに、家の近所の草叢の中にかくれてゐる。すると、かれの味方であるところの友人たちが、この隠れてゐる花婿を探し出し、わアわアと歡聲をあげて、花嫁の側につれて来て坐らせるのである。

じれつたい照れ隠し

この面白い結婚式で、花嫁花婿はどんな顔をするか、素振をするか、これがまた興味津津としてつきないところのものである。この地方の結婚は、花嫁花婿相思の場合もあり、またたとひさうした戀愛關係はかもされてゐなくとも、兩人たがひに顔見知りの場合もあるが、時には親たちの間だけで選ばれた仲であつて、當人同志は一度も逢つたことのない、他の部落のものであつたりすることも珍らしくはない。さういふ場合には無論のことであるが、さうでない、お互ひにもう知り抜いてゐる仲であつても、この際、花嫁も花婿も、

まるで見も知らぬ赤の他人、それこそ生れて初めてお目にかゝる二人である風をするのが、この地方の土人の風習になつてゐる。

で、花婿がその友人連中によつて、ヤンヤと囃し立てられながら、花嫁のそばに坐らせられると、花嫁さんは急にくると花婿君にお尻を向け、そつぱうを見てツンとすまし返つてゐる。女にかういふ態度を見せられて、男たるもの、いかでかまともにお嫁さんのお尻を拜んでゐられようや。そこで花婿君も、「何糞ツ！」とばかり、これも花嫁さんにお尻を向けて坐つてゐる。ちよつと、好いた同志が背中と背中といふ形。こゝらが、たがひにおほこ同志の、含蓄のあるいいところと、言へば言ひもされる。しかし、このまゝで、いつまでも仲裁が出なかつたら、はなはだ議事の進行がはかばかしく行かないことになる。これを見てゐる双方の親たちや、親戚や、友人たちこそいゝ面の皮といひたいところだが、この連中は、當の二人がお互にお尻を向け合つてゐる容子に、ハラ／＼はしてゐるが、さて仲に入つて取持つてやらうとするものはない。

と、そこはよくしたものです。この道だけは、べつだんにさういふ仲裁のない方がよい。

そして、男も女も、年頃になると、これだけはちやアんと教はらなくても、よく心得てゐるもの。いや風習として、この地方では親たちや、肝煎役が、それとなく前以て教へこんであるのでせう。

花嫁はニンマリと

かゝるジレツタイ、照れくさい背中合せの數分間がすぎると、やがてこのラヴ・シーンは、女の方から働きかけて、すこぶる詩的に、またすら／＼と運ばれる。ごらんなさい、花嫁は、はづかしさうに、もぢ／＼し始めました。にんまりと笑ふ。あれ、さつきから、あのむつちりとした、蠶のやうにふくらんだ手の指でいぢくり廻してゐた蒟醬の實を、肩越しに男の、花婿の手に渡しました。アレ、横笛のやうな煙管を取り出しました。花嫁さんはしとやかに、それをくはへて、火をつけました。ふつと煙草の煙を一口輪にふきました。そして、その火のついた煙管を、これまた肩越しに、男に、花婿さんの手に渡しました。仇つほい、吸ひつけ煙草です。花婿君は、すなほに煙管を受けとつて、おいしさうに、こ

れこそ處女の最初の唇を吸ふやうに、吸ひました。その嬉しげな顔よ。これでわれわれは、安心してよい。この恵まれたる二人の男女は、ここに固く偕老の誓ひを立てたわけなのである。處かれば品變る。これが、メケオ地方における祝言、さしづめ日本なら三々九度といふところ。神酒を飲み合ふかほりに、煙草を吸ひ合つて夫婦の堅めをするのである。この珍妙なる吸附タバコによつてスタートを切つた新夫婦の仲は、しかし煙のやうにはかなく、消えはしない。これから一箇月乃至一年を経て、花婿花嫁双方の親たちの間に、改めて贈物の取交しが行はれる。そしてこれがすむと、盛大な二人の結婚披露の屠豚の宴會が催されるのである。

いやがる花嫁をむりやりに

このメケオ地方の掠奪式結婚と似たものは、同じくブリテイッシュ・ニューギニヤのロ地方の結婚風俗である。この地方の結婚取引、即ち婚約の結納の商議や、取交しは、ほほメケオ地方のそれと同様であるが、その結婚の経過は、だいぶ異つてゐる。

ロ地方では、結婚式の當日、花婿の朋友連がすつかり集まつて、花嫁の家を襲撃するのである。むろんこれは本當の襲撃でなく、摸擬のものであるが、とにかくその男連中はえらい勢ひで、喊聲をあげて花嫁の家に侵入し、花嫁をひつさらつて、わアツと逃げるのである。

この時、花嫁は、ひツかいたり、手足をばたつかせたり、嘯みついたりして、大いに武勇を奮つて抵抗を試みるが、なにしろ多勢に無勢、手取り足取り、かついでゆかれることになる。また花嫁の家には、豫め防禦軍が配置されてはゐるが、これも遂には攻撃軍にまけてしまふ。この時に哀れを留めるのは、娘の母である。かの女は愛する娘をさらはれる悲しさに、狂氣したやうにさわぎ立て、棍棒をふるつて、あたりかまはず打ちまはし叩きまはして、掠奪者に對して、呪ひの罵詈雑言をあびせかけるのであるが、やがてその元氣がなくなつて、わツとばかりに泣き倒れる。これに和して隣近所、村の親しい女房連や、親類の女たちも、共に悲しみを分つといふ様子で、いつしよになつて泣き叫ぶ。そして母のなげきはなか／＼止まず、三日三晩泣きつづける慣はしになつてゐる。

一方生捕りにされた娘は、婿方の男たちに擔がれて、婿の家のヴェランダの臺座の上に据ゑられる。花婿はどうかといふと、これも彼のメケオ地方の花婿のごとく、花嫁の掠奪隊の凱旋して引揚げて来るのを見ると、すばやく逃げ出して、隠れてしまふ。しかしそれもすぐ友人たちに引捉へられる。そして友人たちはその花婿の顔に、いろんな化粧品を塗りたくり、花婿の装飾でかざり立て、花嫁の側につれて来て坐らせる。けれども花嫁と花婿は一切口をきゝ合はぬばかりか、双方たがひに無關心の、見て見ぬ風を装ほつてゐるのである。

かうしてその夜一夜が明けて、翌朝になると、花嫁方の父親が、花婿の父親に掛け合ひにやつて来る。そして嫁方の父は、ずるぶん思ひきつた罵言雑言を、花婿方の父に向つて吐くのであるが、この際、婿の父はすべて堪忍袋の紐をゆるめて、その雑言を聞き流してゐなければならぬ。そして結局は、一頭の犬の殺したのを贈り物として差出し、これできア〜と訛をいれる。そこで花嫁の父も、それではと、機嫌を直すといふ段取りになるのである。

豚を殺して

さてこの父親同志の和解の運びがつき、娘の父親が自分の家に引取ると、それで萬事穩便に済むのかと思ふとさうではない。今度は娘の家の方で、一隊の掠奪遠征隊が編成される。そしてかれ等は、勢ひするどく男の家を襲撃して、望みだけの家畜を掠奪して歸ると、前述のメケオ人の花嫁の掠奪隊のするが如く然るのである。これでしかし、掠奪さわざは一段落つく。

娘の方の掠奪隊が、目出たく凱旋して引揚げて来ると、その日の午後、すぐに結婚式が舉行される。花婿の家に人質にとられてゐた娘は、花婿方の親族の女たちの手で、手落なく立派に、花嫁としての化粧や装ひを施され、改めて花婿の親の家の、ヴェランダの花嫁の座に着く。男もまた花婿の威儀をととのへて、御兩人席をならべて着座する。しかしこの時に及んでも、二人はまだお互ひに、口もきかない。注意も拂ひ合はない。かくて二日目が暮れる。

集會第三日。同じやうに、花嫁花婿はヴェランダの臺座の上に坐つてゐるが、この日になると、それまで頑固に知らぬ顔をしてゐた花嫁も、さすがに角を折つて、いよいよ花嫁の方から婚殿に向つて、蕪醬の、例の愛を象徴する果實を手渡しする。これでやつと、結婚成立といふことになるのである。この夫婦仲直りの式がすむと、それまで家にゐて三日の間泣きつぶれてゐた花嫁の母親が、この結婚式場に現はれる。つまり彼の女は、前々日花婿の父の贈つた屠犬の贈り物によつて機嫌を直したので、おまけにこの時は手土産として、豚を一匹殺して持参する。これでめでたく結婚式の前半は終るのである。

さてその後半の儀式であるが、これは前半即ち前述の筋書がすんでから、三週間乃至八週間の後にとり行はれるのが普通である。この式は即ち里歸りともいふべきもので、これが済まない間は、花嫁はいつさい實家側の村を訪問することができず、また實家側の村から持つて來た食物を食べることが許されない。

盛んな婿入り

さて、この期間がすんで、いよいよ結婚後半の儀式、即ち里歸りである。この儀式は、まづ花嫁方の親類たちから、花婿方の親類一同に、嫁の實家へ訪問してくれといふ、招待を受けることに始まる。この招待を受けた花婿方では、親類縁者呼び集め、花嫁を先頭ににして、一大行列を組んで、花嫁の實家へと乗込んでゆくのである。ところがこの際に彼等等は、特に夥しく澤山な飾り物を、花嫁のからだに付けさせて行く。また數頭乃至十數頭の豚を屠り、これを一頭づつ棒の真中にぶらさげて、二人づつの男に擔がせて行く。これは里歸りに際して、花婿が新嫁の両親に贈る、婿引出なのである。この時、花嫁の身につけて行つた、多くの裝飾品もまた婿から嫁の親たちに贈る贈り物で、嫁の實家につくと、それは残らず脱いで置き残して來るのである。

嫁の實家でも、またこの婿引出を唯取りするやうなことはしない。即ちこれの返禮として、婿の一行に對し、魚とバナナを充分に贈り返す。婿の一行は、この土産物を貰つて村に歸ると、それを親しい友人たちや、またはその結婚について何等かの盡力をした人々を集めて分配し、共に喜びを分ける。この里歸りが済んでから數日の後、花嫁と花婿は再び、

今度は行列なしに、二人連れで仲よく嫁の實家を訪れる。この時にも、嫁の親たちから、二人に贈り物のあるのが普通である。

グロな饗應

トールス・トレイト地方の結婚もまた、掠奪結婚に属するものである。この地方の土人青年は、目ざす他家の娘をわが妻にと思ひこむと、自身でその娘を自分の両親の家へ、攫つて来る。そして自分だけは、近所の藪の中にかくれてゐる。両親はむろんわが子の味方で、倅の攫つて来た娘を、倅に代つて自分の家のどこかに監禁して隠して置く。

やがて翌朝になる。娘の両親はそれと嗅ぎつける。すぐに一族郎黨が招集される。かれ等は手に手に、弓矢、棍棒その他の武器をたづさへて、娘をさらつていつた青年の家へと襲撃して来る。青年の家でも、決行した以上、これに對する防備の手配ができてゐる。そこで、激しい娘の争奪戦が演じられる。双方とも、相當の負傷者が出る。しかし、死者はこの際、いづれ方にも出さないことになつてゐる。

一方この戦ひによつて、双方の両親の間に、娘の取引値段について、商議が交される。しかしこの談判は、結局まとめられる。そしていよいよ、結婚といふことになるのであるが、この際掠奪された娘は、眞紅の顔料で顔を塗上げられる。ことに面白いのは、下袴を何枚も何枚も着けられることである。娘はその重さで歩けぬほど、たくさんの下袴を穿かされるのだ。そしてこの風俗のまゝで、一箇月の間は、未來の夫たるべき青年の両親の指揮を受けてゐなければならぬ。この一箇月が済んで初めて、この重いベティコートを脱がされ、顔の繪の具をはがし、新粧をこらして手づから夫たるべき青年に、食物の贈物をする。これで結婚の儀式は完了するのである。

これ等の島々では、新しく結婚した男は、結婚後なるべく早々に、新妻の方の親類に馳走を出さなければならぬ風習をもつてゐる。新郎は結婚後、自分の身内のものに馳走をするのが例になつてゐるが、その時自分の親類に出した御馳走と同じものを、新婦方の親族にも振舞ふのである。この馳走を振舞ふ方法が頗る特殊なもので、これが一種の遊戯の形になつてゐる。

人間の井鉢

この時の馳走はすこぶる莫大な分量で、これを地上に山と積上げる。これを三箇乃至四箇の容器に盛り上げて、客に贈るのであるが、この容器がまた甚だ振つてゐる。といふのは、その容器は普通の器具ではなく、人間で形作つた容器なのだ。

まづ招かれた新婦方の人々が、地上に積上げられた馳走の山の側に、内側に向合ひ腕をつないで、一組づつ輪を作つて並ぶ。そしてこの輪のめいめいは、上體を前に曲げて俯向くのである。かうすると、こゝに一箇の人間でできた、立白か三寶のやうな形のものできるであらう。すると、馳走の宰領をする双方の司會者が、「よろしい」と號令をかける。かねて接待役を承はつてゐる面々は、この司會者の命令と同時に、山盛りになつた御馳走を、手早くこの人間の容器の中へ、即ち輪になつて俯向いてゐる人々の背中へ、どしどし積上げるのである。載せるほどに積み上げる程に、御馳走の重量は漸次に増して行く。そして遂に、臺になつてゐる人々が、こらへきれないまでの重さになる。すると、次の人

輪の上にまた盛上げる。そして馳走の山が無くなるまで、これを繰返す。

すつかり積上つてしまふと、誰かが水瓶をもつて来て、容器になつてゐる人々のからだに水をぶつかける。或は、二つの若い椰子の實を割つて、その汁を頭にふりかける。その上に、白い粉をふりかける。これで容器の人々の恰好は、すこぶる滑稽な、をかしたものになる。どつと人々が笑ひころげる。愉快である。面白い。主客ともに、和氣あい／＼と陽氣にはしやぐ。苦しみと諧謔が、同時に授受者の間に與へられるのである。そこで、時には、この目出度い馳走の授受式にも、噴嘩の起ることもある。

結婚式の泣き女

葬式に泣き女のつくのは、朝鮮や支那にもあり、また哀悼の意味からいつても、かくべつ不自然な風俗とは思はれない。結婚もまたその新嫁の家族からいへば、一種の別離であつて、多少の哀しみを感ずるものである。故にその母や女の肉親には、泣いて別れる風習もないではないが、その哀しみはあるにしても、總じて結婚はお目出度である。少くも目

出度さの方が、段違ひに大きい。區々たる別離の哀しみは、その大きな慶びによつて、打消されてしまふのが普通である。だから一般には、葬送が哀悼であるに對して、結婚は慶賀であり、表面に哀しみの色を表はさない。しかるに、この慶びを隠して、表面に哀しみを現はす民族がある。それは蘭領ニューギニアの、バプア人である。この人種は、結婚の行列に泣き女をつけ、結婚行進曲として、悲しみの曲を奏するから、ちよつと變つてゐるであらう。

この民族の間では、結婚式の前日、新嫁は大ぜいの身内や村の女たちに伴はれて、新夫の村の一軒の家に繰込む。こゝでこの新嫁の一行は一夜をあかし、翌未明に、花婿の家へと繰込む段取りになつてゐる。ところが、この花嫁の行列に附添つて来る女たちは、途中でも大聲をあけて、おい／＼と泣いてゐる。宿に着いてからも、なか／＼泣きやまない。どころか、夜がふけるにつれて、その泣き聲はますます激しく、泣き人の人數もしだいに殖える。これはかの女等が、わが村から花嫁なるかの女を失ふことに對する、哀悼のためであるといふ。

さて、かくのごとく夜を徹して泣く彼女等は、泣くと共に、ちやうどお通夜の御詠歌のやうに、夜ツびて哀歌の合唱をする。それは甲高い高調子の大聲にはじまり、次第に調子をおとして、遂にむせぶがごとく哭する低い聲となつて消える哀歌で、葬送の絶望的な歌曲と同じである。

この泣聲と哀歌は、その夜もすぎて曉の三時となると、その絶頂に達する。それはいよいよ花嫁の出發の時刻の近附いたことを知らせる。やがて夜はほのほのと明けはじめ、東の空が紅に染まる頃になると、かねてわが手で新鮮な化粧を凝らし、樹皮の下袴をつけ、さつぱりとした頭飾りをした新嫁が先頭に立つて、泣きつづける同伴の女たちを従へて、新婦輿入の行列が、新郎の家に向つて、しづしづと、しめやかに繰出されるのである。

森通の制裁

行列は、村の家並にはさまれた街道の間を行く。途中、花嫁は、頭髮に草花をつけた花嫁は、そのふくよかな兩腕をあらはに、斜め前上の方にひろげて差上げ、眼をつぶつて行

くが、婿の村の老いたる男がひとり、東道役といった形で、その新嫁のわきに附添ひ、軽く花嫁の腰をかき抱いて附いて行く。行く行く、この女ばかりの哀しみの行列に、花婿の村の女たちも大勢加はつて、行列は一層盛んなものになる。村の街道には、豫め、村人の用意で、三尺高さに板を敷いてゐる。その上を、行列は行進するのである。しかし、奇妙なことには、この物々しく、また華々しい入興の行列にも拘らず、婿の村の男といふ男は、いつさい我關せず焉といふ顔で、坐つてゐるのだ。かくて行列は、婿の家の前まで行くと、散々ばらばらに崩れてしまふ。そしてその後の儀式については、傍觀者には見る事ができないのである。

これ等の島々では、離婚は、ごく手がらく、また盛んに行はれる。即ち婿が嫁を氣に入らぬと思へば、婿から嫁を離縁する。また嫁の方でも婿に満足しなければ、逃けて歸る。また、妻君にいゝ人ができれば、その男と手に手をとつて、さつさと駈落する。しかしかういふ場合、たいていは婿と嫁と兩家の間に確執を生じ、ひいては部落間の戦争となり、種族同志の戦ひとなり、駈落の場合には、人妻を盗んで逃げた男は、たいてい盗まれた夫

のために殺される。それが首尾よく果されない時は、夫の村人が、また種族の人たちが、その男をつかまへて殺す。そしてそれが原因になつて、兩者の屬する種族間や、部落間の争闘が起きる。また中には、さうした女からの離婚の場合、夫の方から嫁の兩親に向つてまづ結婚の節、嫁の代價として支拂つた結納金の返還を要求する地方もある。そしてこの要求が容れない場合には、こゝに初めてうるさい種族間の争闘が、口火を切られるのである。

マーシャル、カロリン

椰子の梢が危い

マイクロネシヤ諸島の土人の結婚には、祝ひの披露宴を催ほすといふこと以外、特に儀式といふべきほどのものはない。そしてポリネシヤ諸島土人におけるが如く、結婚に宗教的要素は全然含まれてゐないのである。

カロリン群島では、土人の結婚は、男が自分の妻にしたいと思ふ女を、自分の家に連れ

て来るだけのことで、すると男の母親が、その女の背中に、椰子油を塗つてやる。それで天下晴れて、女はその男の妻といふことが認められる。そこで花の冠を戴いて、披露宴が催される。ただそれだけのことである。

われわれ日本人の新領土マーシャル群島では、男は絶対に酋長の妻とちかづきになるとを禁じられてゐる。たとひそれが濃い親族の間柄であらうと、いつたん酋長の妻となつた者とは、交際は許されない。しかし酋長の娘でも、酋長以外の者と結婚してゐる場合には、別に自由の束縛はない。

男の嫉妬のいちばん烈しいのは、ギルバート島である。こゝでは、うっかり若い人妻に言葉でもかけようものなら、それこそ絶対にただでは済まない。たちまちその男のためにぶん撲られるか、傷をつけられるから御用心。だからこの島の土人は、あらまし顔面に瘡痕がある。これはみな、さういふ嫉妬やきの亭主のために、鱧の牙で作つた兇器でひツかかれた傷のあとなのである。

このギルバート島には、その嫉妬やきの民族性から、今もなほ一種特別の妙な習慣が残

つてゐる。それはこの島の土人は、誰も彼も椰子の樹に登つて椰子酒をとるのであるが、この時に樹に登つてゐる時は、きつと腹いっぱいの大聲をはり上げて歌をうたつてゐる。それはその昔、或る一人の土人男が椰子の梢にのほつて、黙つて椰子酒をとつてゐたところが、丁度その下の方で結婚間もない酋長の妻が沐浴をしてゐた。酋長は椰子の上のほつてゐる男を、こいつはてつきり木の上にかくれて、自分の妻の裸姿を盗み見てゐるのだと信じて、嫉妬のいかり心頭に發し、いきなり弓をとつて、樹上の土人を射落してしまつたのださうである。それ以來、土人は恐れをなして、椰子酒をとる時は、できるだけ騒々しくして、自分は内密事をしてゐるのではないといふことを證明するのだといふ。

姉妹はみな女房

このギルバート諸島ではまた、或る姉妹連中のうちの一番姉の娘と結婚すると、その男は残る妹たちに對し、それが何人であらうと留置權を授けられてゐる。そしてもしその男が、物質的に扶養力があり、自分がさうしたければ、それ等の妹たちを、一人でもまた全

部でも、自分の妻にしておく権利がある。そして他の男がその妹の一人と結婚したいと思ふ時は、まづもつて長姉の婿に向つて、伺ひを立てなければならぬ。そしてその許しを得た後でなければ、絶対にその義妹たちとは、結婚ができないのである。

マライ半島の花嫁

大名行列

マライ半島は、アジア大陸の東南端、インド支那と、マライ群島とをつなぐ、長さ一千マイル、幅最大二百マイルの大半島である。故にその風俗は、多くインド支那のそれに等しく、またマライ群島のそれに相通するところがある。

この半島の出産あるひは結婚風俗は、一般にヒンドウ教またはシャマン教に圍まれた、アラビヤ風の儀式が基礎になつてゐる。この結婚式における最も花々しい繪畫的なものは、半島の東海岸地方に行はれる行列で、これは大きな鳥や獸の形に似た、美しい車に大勢の候補者がめい／＼乗つて、一種の觀兵式風の裝飾行列である。西海岸地方、あるひは

東海岸地方の一部では、この行列の車の代りに、候補者が男の肩車に乗る。

半島一般に亘り、殊に大都會では、娘たちの隠棲生活の風が行はれてゐる。そして結婚の申込はやはり、男の方の兩親から働きかけて行くので、自分の息子の生涯の妻として適當な女と認めると、まづ男の兩親或は後見者が、娘の兩親に結婚の申込をする。この申込は兩親または後見者の命を奉じて、選ばれて行くので、こゝで妻の要求があればその要求について、双方の商議が行はれる。そして縁談が成立すると、結納の日取りがきめられる。結納日が來ると、婿方代表者の一人が、例の實のなつた蒟醬の木の枝を飾りつけた、いはゞ日本の結婚式に使ふ鳥臺のやうなものに添へて、結納金の一部分を銀または寶石で、婿方の兩親に贈るのである。

西洋流の約婚指環のごときものは、一般にマライ半島では贈られないが、ペラクでは椰子の花で作つた二個の指環を、婿方から嫁方に贈る。その一つは嫁の兩親に、一つは嫁に贈られるのである。この婚約が破棄される場合はどうかといふと、その破談が婿方から出たものならば、婿は罰金として贈物の全部を嫁方に没收されるだけであるが、もしも嫁方

の都合で破談にした場合は、嫁側は婿側から受けた贈り物を、倍にして返す不文律になつてゐる。

結婚テスト

マライ人の結婚の儀式は、どちらかといふと、清祓と慰めの儀式が大部分を占めてゐる。そしてそのほかには、結納の支拂と、夫妻間の食物の分配と、村の長老の立合といふ三つの要素をもつてゐる。

マライ蠻人の結婚もまた、以上の三要素を具へてゐることに變りはないが、たゞ潔齋と慰さめの儀式だけはもつてゐない。

その代表的な土民はいはゆるベシン民族である。この民族の結婚の標準は主としてその夫たるべき者が、將來妻を扶養する能力を充分にもつかどうかといふ點にある。かれ等の結婚式は、ちよつと風變りな形式をもつてゐる。即ち新婦新郎及びその近親たちは、まづ豫め作つて置いた土饅頭のまはりに、座を占める。そして新婦側から、新郎に對して、次

のやうな質問を、卒直に發する。

「あなたは吹管に堪能か？」

「あなたは樹の倒れるのに對して賢明であるか？」

「あなたは煙草を吸ふのに精巧か？」

この質問に對して、新郎の答へが満足に果されたならば、今度は最後の實地試験である。それはどういふ風なものかといふと、まづ試される新郎に、一本の紙巻煙草が渡される。新郎はその巻煙草に火をつけて、土饅頭のまはりを逃けてゆく花嫁を、三廻りで捉へるのである。これで首尾よく花嫁が花嫁を捉へれば、二人の結婚の成立が認められる。もしそれがうまく行かなかつた場合には、いま一度この鬼ごつこをすることが、新郎に許されてゐる。

この口頭試験にしても、その花嫁によつて頗る峻烈なのがある。たとへば、第二回の倒木のくだりにしても、

「あなたは木が倒れて來た場合に、どうなさいます。木が倒れて來れば、あなたは壓しつ

ぶされて死んでしまひますが、その時には？」

と、いふやうな工合に、なかなか鋭いのである。マライ半島のやうな、主として森林の中に生活してゐる住民にとつては、朽木が不意に倒れかかつて來たり、また伐木の際に屢屢しつぶされる危険があるので、これに對する宣誓はすこぶる眞面目な、嚴肅な問題となつてゐるのである。

また最後の第三問に對しても、花婿は、

「何の誰その娘と、名ざして仰有るな。拙者は、たとひどんな種類に屬さうと、あらゆる類の猿を探して捉へることができまする。などか、何の誰その娘と限りませうや。」

てな風に、ユーモアまじりに答へてのけるのである。かくてこの口頭試問が終ると、

「バティンもこの結婚を承認なされる。族長も承認召される。」

「若者も、また老人も共に承認する。」

「さあ土饅頭をまはれ、もう一度まはれ。」

といふ。そこで新郎は土饅頭の周囲をまはつて、新嫁を捉へにかゝるのである。パハン

の蠻族も、これと同じことをやつてゐる。

染上げ花嫁

さて、マライ半島の文化の進んだ、いはゆる開化マライ人の結婚はどうかといふことであるが、マライ半島の文化人には回教の影響がかなりあるので、結婚式にも回教僧が中心になるかといふと、決してさうではない。むしろ回教よりも、マライ人の結婚儀式は、ヒンドウ教の風習の上に成立されてゐる。そしてその儀式は、七晝夜續行されるのが普通である。

最初の三夜は惡魔拂ひの儀式と、花嫁花婿が別々に、各自の家庭で行ふヘンナ染めの儀式に費やす。これがすんで第四日目には、花嫁の行列が、花嫁の家にと繰込まれる。そしてこゝに、花嫁花婿は、王と女王の形式で玉座に坐るのであるが、この式の中心となり、特筆に値するものは、その巨大な結婚の新枕である。そして残る最後の三日間は、慣例の潔齋に費やされる。更にこの三日間には、アラビヤ式讃歌の合唱や、餘興として、マライ

劍術やダンスが相繼いで行はれ、そこで、闘鶏、闘牛、インド式舞子踊り、マライ芝居の上演等が行はれる。これは今は主として半島の北方で行はれてゐる。

ヘンナ染めの儀式といふのは、第一第二と別かれ、第一儀式は家内で内密に行はれるが、第二夜の儀式は公開されて、花嫁花婿は各自の家庭において、親戚その他の者の祝ひを受け、贈り物を受けるのである。この夜、選ばれた親族や、友人や、目下の恩をうけてゐる者たちが伺候して、マライの習慣に従ひ、順々に、サフラン染めにして乾かした洗米をバラ撒き、花婿または花嫁の額と手に、悪魔拂ひの米の捏粉をつけ、更にかれ等の手と足にヘンナといふ染料を塗る儀式である。

一日だけの王様女王

第四日の儀式は、花嫁花婿が、一日こつきりの王と女王の振舞をなし、王候の威容を保つ。この日のマライの花嫁の服装は、金糸の縁どりをした、くくり袖の、短かい茜染めのジャケツに、下肢には腰巻と絹のゆつたりとした下袴をつける。更に腕には腕環、足には

踝飾りをつけ、頸かざり胸かざりをつけ、時には数々の寶石をかざるが、この寶石はいつも擬物で、借り物が多い。

花嫁の頭髪はきちんと装飾を施し、一種特別の花冠をいたゞいて、これには金銀箔で作つた、美しいビラ／＼花簪をさしてゐる。花婿の服装も、短かい金糸の上着に、絹のズボン、それに上等のサロンを短か目に履き、頭はこつちりとまとめ、造花などをつけ、首かざり胸かざりよろしく、王者の装ひをこらしてゐる。

これ等の用意萬端とゞのふと、花婿行列の一行は、村の一老女を先頭に押立てて出發する。この行列に、マライ半島も西海岸の地方の僻地では、花婿は親族のものまたは家臣の肩に乗り、またモダンなのは車乗物に乗つて練つて行く。この車は、最近では自動車なども選ばれる。行列には樂隊が付き、クラツカーを鳴らしたりする。しかし行列はすこぶる整然たるもので、肅々として花嫁の家に繰込むのである。

花嫁の家ではすでに、屋内の正の間に、王座と女王座との並んだ、高御座のやうな、けらんらんな座席を作つて、花嫁はその女王座に坐つて待つてゐる。到着した花婿は、その花

嫁の右側に並べて設けられた、玉座にと納まる。こゝで兩人は、幾度も立上つては坐り、坐つては立上つて坐る。そしてできるなら、花婿は、花嫁の裳を敷いて、その上に坐るやうにするのがよいのださうである。

玉座の前には、八角の皿に盛つた神米と、三列に並べて美しいリボンで飾つた、彩色鶏卵が置かれてゐる。

七色の虹糸をバラリと

花嫁花婿は、座が定まると、まづ互ひに誓ひの言葉を交し、それがすむと、前に置いた八角皿の神米をとつて食べる。つぎに兩人手を伸ばし、その手を神水で清める。

これが済むと、マライ半島の結婚式において最も美しい場面が茲に、展開される。それはかねてこの結婚式場には、V字形に七色の虹の花糸が飾りつけられてあるが、神水の清めがすむと、花婿はこの花糸の結び目を、一條づつと引きほどく。ほどかれた花糸は一時にばつと、新郎新婦の頭から足許に落ち懸かる。花婿はその垂れかゝつた七種のリボ

ンの端を、少しづつちぎつて、花嫁と自分の額の上にくすり附けるのである。

これで儀式は全部すむのであるが、散會に當つて、列席者一同は、頭から手押ポンプの水を浴びて清められる。

印度支那の結婚奇風

媒酌結婚

佛領印度支那は、政治的にいふと、トンキン、安南、交趾支那、カムボヂヤ、ラオスの諸國を總括して言つてゐるのだが、これを人種學的にいふ時は、チャム人、カムボヂヤ人、クメール人、ラオス人及び、その他の半未開族と未開蠻族の國である。

そのうちチャム人は、かつてはカムボヂヤ、安南及びラオスの一部を支配してゐた、體力の旺盛な、性質温和な民族であるが、その智力においては衰頽の民族で、印度教と回教を信じてゐる。しかしどちらかといふと、印度教や回教の眞義を解する者は皆無で、主と

して精氣崇拜が、絶対の勢力をもつてゐる。

かれ等は、出産があると、産褥の下に點火して穢れを拂ひ悪靈を拂ふ風習をもち、生兒が六箇月になつてから、健康を豫期するやうな爽快な名をつける。もしこの名が不愉快なものであるならば、悪魔を宿して生兒は脆弱多病となるといふ迷信をもつ人種である。

チャム人の結婚する年齢は、一般に十五歳から十八歳までの間である。そしてかれ等の結婚には、日本の見合結婚のやうに、媒酌人が仲に立つ。それは多く、信頼するに足るところの、村の既婚婦である。男はまづこの仲介人に頼んで、自分の目ざす女に、結婚を申込んでもらふ。仲介人は、男の手土産として、男の衣服一着と、檳榔子、蒟醬、豚肉、米酒等の贈り物をもつて、娘の家へ談判に行く。この縁談がまとまると、二人の許婚が成立するので、男はすぐに花嫁の家に同居し、結婚生活と同じ形式に入つて、娘の両親のために、暫らく勞役に服する。それは娘を嫁がせるために、その両親がうける損害を賠償する補ひなのである。

さてこの許婚中に、一方が破談にすると、破談した方で、相當の損害賠償をしなければ

ならない。しかし順調に進めば、修驗者に伺ひを立てて、占星術によつて黄道吉日をゑらび、正式に結婚の式を擧げるのである。

結婚の形式は、正装した花嫁がいきなり花嫁の實家に赴いて、花嫁をつれて歸るのであるが、この時に、花婿の能力に相應した寶石や貴金屬、衣服、水牛、田地等を、新嫁の財産として登録する。もし結婚後破鏡の綻を見るやうな際には、この登録物が、嫁への手切金となるのである。村をあげての披露宴が、この日から三日間ぶツ通しに催はされる。これがチャム人の結婚の一般風俗である。

カムボチャの結婚

カムボチャ人の結婚は、たいてい男女十六歳の頃に行はれてゐる。最近親同志の結婚は禁じられてゐる。主として常人同志よりも、當人の両親の間で話が纏められる。そして約婚時代が始まるのであるが、この約婚は全然結婚と異なるところがない。といふのは、正式

の結婚式を挙げると、すこぶる費用が嵩むので、たいていの者はさういふ式や披露宴を抜きにしてしまふのである。

縁談がまとまると、婿の側からは、結納として、檳榔子、菟醬、阿仙藥、米酒、煙草を贈る。そしてこの贈物が済むと、男はすぐに名實共に婿となり、養父母の家に同居して、或る期間だけ嫁の實家のために、お禮奉公をする。普通は婿は養父母の家の近所に一戸を構へ、その家に起居して、幾箇月か幾箇年の間に、結婚日に約束した妻への贈り物、即ち寶石類や、多くの贈金を贈り果たし、かつ祝宴に用ゐる六百斤の豚肉と、五十羽の鶏、酒百瓶と三十個の菓子を働き出すのである。

紅い絹糸の守護神

安南人はたいてい男二十歳、女十八歳にして結婚する。これもまた、兩親間で縁談の進められるのが、原則となつてゐる。乳呑兒時代に、許婚の約束の結ばれることも少くない。

カムボチャ人の結婚と異ふのは、この人種では許婚の男が貧乏である場合に限り、未來

の養父母にお禮奉公をするので、一般有産階級にはこの制度は行はれない。有産階級の子弟は、そのお禮奉公の代りに品物でそれだけのことをする。その代償はかなりの額のもので、寶石や、織物、金蒔繪の箱、蠟燭、酒、菟醬、大豚等である。

實際の結婚はごく簡単な家庭的のもので、婿方からは新たに數々の贈り物をし、できるだけ華やかに、幸福を意味する赤色を用ゐた裝飾が施される。またこの際夫妻兩家の祖先に對し、犠牲が供せられる。この日の花婿から花嫁に贈られる引出物は、ちよつと珍らしく、一番の體鶴ときまつてゐる。これは誠實の表象で、これを「赤き絹糸の守護神」と、「月姫」の前に供へ、新夫婦はこの神の前に平伏して、二人の永遠の幸福を祈願する。次に新夫は、嫁方の祖先の靈前に參拜し、あとは祝宴に移り、第一日は終る。

第二日は即ち、本式の嫁入りである。この日花嫁は、晴れの美装で夫の家に入り、まづ夫の家の守護神の前に額つき、次に壯嚴な饌物を夫の家の祖先をまつる祭壇にそなへ、ここにこの家の人となることを誓ひ祈る。この時の供物は、すこぶる結婚式において重視される。この跪拜と祭祀がすむと、新婦は永久に婚家の人となり、婚家の信する宗教の信徒

となるのである。

安南の婦人の地位は、カムボヂヤのそれよりも恵まれてゐない。一夫多妻が許されてゐる。離婚は夫の方からは頗る容易に行はれ、それには七箇條の理由が要るが、それもごく形式的な、いゝ加減なものでよいらしい。

ラオスの戀愛市場

ラオス人は、アリヤン人種或はインドネシヤ人種から出た人種で、主としてメコン河の流域に住んでゐる。この人種は多く、男は禪一本、女は腰巻だけの裸體人種で、主として農牧に従事してゐる。むろん半未開の人種である。

彼等の青年たちは、晝間は野良に出て働いてゐるが、野良の仕事から歸つて來ると、あとは誰も彼れも、女狩りを唯一の楽しみにしてゐるといふエロ人種だ。部落には特別の舞臺のやうなものができてゐる。夕方になると、その舞臺には、村ぢうの年頃の女たちが、けばくしいスカーフをかぶつて、丁度日本の遊廓の女郎の張店然と、出張つて坐つてゐ

る。色好みの土人青年たちは、わつしよ〜とこゝに出かけて行つて、好きな女にモーシヨンをかけるのである。

女連の坐つてゐる前面には、あたかも芝居の脚光のやうに、椰子油のランプが置かれて、ちらちらと照らしてゐる。また、蒟醬の嚙煙草のいつぱい入つた皿があり、竹の筒でできた燂壺が置いてある。男等は、その女の前に行つて、蹲がみこみ、根氣よく鼻唄なんか唄つて、咽喉のいゝところを聴かしたりして、女を誘惑する。話しかける。女はそれに對して、勝手な返事をしたり、悪意を示したり、名ざしをしたりして、好きな同志は組になつて、戀をさゝやき合ふ。まるで自由戀愛市場である。

戀愛市場でできた戀が徹底すると、いよいよ結婚にまで進められる。ところでこの約婚及び結婚の形式は、シヤムやカムボヂヤのそれと、ほど似たりよつたりのものであるが、大體ごく單純で簡便である。

出來あがつた一對の男女は、仲介として、一人の魔法婆を頼む。するとこの魔法婆は、怪しげな神様の前に二人をつれて行き、こゝで一匹の生きた鶏の首を切つて神の犠牲に供

へ、その前で二人の手と手を、木綿綿で繋ぎ合はす。また女たちは、牛肉の細長く切つたのと、米の握り飯と、蟋蟀の揚げたのと、米酒をもつて来る。そこで祝ひの酒宴といふことになるのであるが、この祝宴にはすこぶる幼稚な原始的な音楽を奏し、ダンスをやる。

セイロン奇習

ヴェダの髪切り

ヴェダ人種といへば、曾ては南印度全部を占領して、勢力を揮つてゐた人種である。今はセイロン島の代表的住民で、身長割合に短かい、縮毛の叢林種族、ほとんど狩獵のみを業としてゐる。近代文明の影響を全く受けてゐない。現今のヴェダ人種には、三種類ある。海岸ヴェダ、部落ヴェダ、純粹の未開狩獵民である。

このヴェダ人種の結婚はどうかといふと、この人種はすべて、従兄妹同志の間で婚姻をとり結んでゐる。これはともすると近親相姦の弊に陥り易く思はれるが、その範圍は古來

すこぶる嚴格に守られて來たらしい。今でもこの人種の性的道徳は高等なものとして知られてをり、嚴密に一夫一婦制度を實行し、既婚未婚をとはず、女は至極貞淑である。

求婚のしるしとして、男は娘の父親に、蜂蜜と、鹿の乾肉と、大蜥蜴の肉とを贈る。すると娘からは、その返禮として腰紐を男に贈り返すのである。婚約の取交しはこれで成立するのだ。

寡婦の再婚は一般的に許されてゐる。しかし多くの場合、死んだ夫に弟があり、それがまだ未婚であつたならば、その弟の妻に直る習慣である。それはとにかく、寡婦となつても品行すこぶる方正で、その貞淑なることは未婚の處女と變らない。

この人種の結婚風俗で異つてゐるのは、マライ半島その他の未開土人の結婚が、多く妻女の賣買制度であり、従つて多く男の方からのみ娘の兩親に、代價を提供するのと反對に、この土人間では、娘が結婚すると、その娘の父親は、婿に對して、自分の所有地の一部を分け與へ、或は私有財産の一部を與へる。そのほかに婿引出とし、かれは娘の夫に弓と箭と、時にはそれに獵犬までも添へて與へる。それは、

「この弓矢をもつて巧みに、また豊富に鳥獸を狩り捕つて、わが娘を充分に養つてやつてくれ。」

といふ意味なのである。婿の方からはこれに對して、娘に向つては一束の頭髮を、娘の両親には食物を贈る。ヴェダの女は、一般にかもじをつける風習があるのだ。しかもその女たちが、頭髮にかもじを入れて、鬘束を作るのは、既婚の女に限られてゐる。ところがこのかもじの用も、實は一時的のものに過ぎない。といふのは、この未開人の女たちは、むろん頭髮を梳つたり、油をつけたり、髪を洗つたり、そんな面倒くさい手入れはしない。そこでちぎ、入れたかもじも汚なくなつて、用に堪へなくなるのである。しかし長い間の習慣で、花婿が、自分の頭髮や、自分の姉妹の頭髮を剪りつつて、これを結婚の贈物とすることが、一つの結婚儀禮となつてゐるのである。それ故、この土人の男たちは、決して自分の頭髮を、わが妻以外の女に、剪つて與へることはない。

「婿殿御入り候へ」

セイロン島でもつとも有力な人種は、シンハリーズである。

シンハリーズ人は、娘が結婚期になると、占星術師に見せる。これがこの土人にとつては、女一代の重大事件の一つになつてゐる。占星術師はその娘の運命を占なひ、將來の結婚生活の吉凶を判断するのである。そして娘は、この際、數日間自宅の一室に籠居、謹慎の生活を送り、これが終つて入浴し、鏡に映つたわが顔を見るのである。

縁談が進められた時は、むろん娘の両親は、占星術師を招いて、その縁談の良否を占はせる。よしときまれば、また改めて占星術師が、結婚の日取や、結納取交しの日取時間までも占なつて、黄道吉日を決定する。結婚式後數日を隔てて、大祝宴が催はされ、舞踏會が開かれる。會場の床や天井は、すつかり白布で覆ひ隠されてしまふ。花嫁花婿の實家の玄關には、大型の葉のついた縁の木が、兩側に植ゑつけられて、清爽な裝飾を施す。祝宴の料理に使ふ食品や、菓子が集められる。婚禮の夜は、殆ど徹夜で、婚家の女たちは手傳の家の女たちと一緒に、祝宴の料理を作るに忙しい。嫁の家では、結婚式の前日、知己親族を招待し、それ等の參會者はいづれも、思ひ思ひの祝ひの進物をもつて來る。

婚禮の日は、まづ花婿がとつて置きの正装をして、親族知己たちに守られ、行列を作つて、花嫁の両親の家に繰り込んで行く。さてこの行列が、花嫁の家の前に到着してみると、花嫁の家の正門には、横木が交叉されて、そこに男の見張人が張番をしてゐる。そしてその男は、到着した花婿の一隊に向つて、

「この門は通せん坊をされてゐますよ。だが、ほかならぬ今日の花婿さまなれば、あなた方だけは通して差上げませうよ。」

と、いふやうな意味の唄を唄ふ。

すると花婿の行列の一人がづかくと前に出て、

「門に横木を交してあるのは、大切の大切の花嫁さまに、誰の手も指もささせぬための、御用意と察せられる。しかし僕たちは、その花婿さんを自由にしていよいよ、たつた一人の花婿さんの行列だ。さア、どうぞ安心して、この門を通して下さい。」

と、唄で頼む。門番は、交叉してゐた横木を取除ける。花婿の一隊は邸の内に入る。しかし、ヴェランダで休むだけで、家の中にははいらない。婿の手土産として、数々の料理

が持参されてゐる。花嫁の一家のものは、その料理を受取つて、奥の座敷で御馳走になる。この間さかんに、景氣附の空砲が放たれる。古來の風習では、この時、花婿は花嫁の式服と装身具を持参して、花嫁に着けさせるのもある。

花嫁の禮儀

式は花嫁の家で行はれる。花嫁花婿は、白布を敷いた式場の、設けの座に膝をならべて坐り、皿に盛つた白飯を、お互ひに右手でとつて三度食べ合ふ。すると司會者たる、花嫁の伯父、即ち母の兄が花嫁花婿の手の小指を、糸で繋ぎ合はす。これで式は済むのである。やがて新たに成立したこの夫婦は、立上つて手を伸ばす。結ばれた糸が切れる。二人は肩を並べて、來賓の婿方嫁方双方の者たちの前に立ち、手を舉げて挨拶し、

「どうぞ末永によろしく。」といふ。

客たちもこれに答へ、携帶して來た祝ひ物を二人に渡す。後は祝宴である。

結婚式がすんで數日の後、新夫婦は、友人たちと共に、婿の家を訪問する。この時、花

嫁は花婿の先きに立つて歩く。これは途中、結婚前に花嫁に想ひを寄せてゐた男などが、突然花嫁に襲ひかゝつて來たりするのを、花婿が防ぐためである。また花嫁は、この途中で昔なじみの男と行違ふやうなことがあつても、決して顔をあげてその男の方を見てはいけない。さういふ場合には、しとやかに視線を地上に落とし、俯目になつて行くのを禮儀としてゐる。婿の家に着くと、銅鑼が賑やかに打鳴らされ、景氣よく空砲が放たれる。

印度の熱情

殺伐な婿選び

インド人の結婚風俗はすこぶる多種多様、それがいづれも珍奇な、われわれの興味をそそるものばかりで、詳しく述べればこれだけで、立派に一冊の書物になるだらう。紙数が許さないで、こゝにその全部を盡すことのできないのは甚だ残念であるが、仕方がない。そこでその一部を、擧げることにして置く。

最初はカラン族のそれである。まづこの土人娘の婿選びの方法が、よほど異風である。これはマツボンガルといふ祭禮に行はれる。この祭禮には、多數の牡牛の角に、椰子の葉で作つた花紙と、貨幣を包んだ布片を縛りつけ、銅鑼その他の樂器を騒々しく打ち鳴らし、牛を脅やかし、いれ切つたところでそれ等の牛を放して、猛り狂はせるのである。

さて、この祭場の一隅には、結婚の申込を待つ娘たちが、この兇暴な催しを見物してゐる一方、それ等の娘たちに求婚しようとする青年等が、今日ぞ勝敗の分れ目とばかり、勇氣りんく、手ぐすねひいて待構へてゐる。そして怒れる牡牛の群が放たれるや、かの青年等は、乾坤一擲の勇を鼓して、その狂牛の群の中にとび込んでゆく。そしてその中の一頭から、角に縛りつけた布片を首尾よく奪ひとつて、これを見物中の意中の娘に贈るのだ。この勇氣を缺くものは、いかなる娘にも、取合はれない。

またクルグの結婚でも、娘は意中の男の體力を試すのに、面白い方法を採用してゐる。それは地上に直生したバナナの樹を、つづけざまに六本伐り倒す男でなければ、結婚の資格がない。しかもその切方は、軍刀で、すばりと、一木一打にするのである。

廻り口説き

ボンダ・ボルジャ山中のインド人は、冬になると地上に大きな穴を掘り、冬はこの中に子供たちを入れて、暖をとらせてゐる。ところが春になると、この穴の中に、村ぢうの娘たちが、ごちや／＼と入つてゐる。村の青年たちは、この娘のいつぱい入つてゐる穴のそばに行つて、意中の娘に當つてみる。その娘にはねつけられたら、別の娘、またその娘も駄目なら次の娘にと、言ふことをきく娘が見附かるまで、さうして口説いて廻るのである。

この「廻り口説き」のほかの、もう一つの方法は、意中の娘をひツぱり出して、二人で藪の中に這ひ込む。むろん二人とも素ツ裸である。二人はそこで、枯木を集めて火を焚く。すると充分にそれが燃え上つたところで、娘はいきなり火のついた枝をとつて、男の背中に押しつける。男が「あツ、熱いツ、痛いツ。」などと、頓狂な聲をあげたら、この戀は成立たない。なアにと平氣で笑つてゐる男なら、女はその男に生涯身を委せることを承諾するといふ寸法。

ナヤーデイス叢林の間では、娘が婚期に達すると、木の葉で作つた小舎の中に蟄居してゐる。すると村の若い男や女たちが寄つて来て、その小舎のまはりで唄をうたひ、ダンスをやつて騒ぐ。そして男たちは踊りながら、てんでに持つて来た棒を、壁越しに娘の小舎の中に突通す。そしてその何本かの棒のうち、中の娘は一本だけ自分の手で抜きとる。と、その棒を突通した男が、その娘の亭主として選ばれるので、まるで抽籤結婚のやうなものだ。

試験的同棲

ムデニヴァルといふ山地土人は、結婚の準備ができると、當人同志が手に手をとつて村を脱け出し、山の洞窟に入つて、數日間二人きりの生活をして来る。それでお互ひに氣に入り合へば、男は女に、腕環と着物と竹の櫛を與へて、夫婦になる。しかしこの同棲試験で、お互ひに夫たり妻たることが不適當であるとわかれば、それつきり結婚はやめにして、互ひに新しい別の相手を見附ける。

掠奪形式の結婚風俗は、クンヅ土人の間に行はれてゐる。花嫁の行列が村境まで來ると、かねてこゝに待伏せてゐる婿方の一隊が、てんでに竹の棒を振上げて、花嫁の行列に襲ひかゝる。花嫁の従者の女たちは、それと見るや、同じく竹槍や石や土塊で、これと渡り合ふ。そして戦ひつつ、二組の者が婿の村にまで來ると、戦ひは止み、嫁は婿方の一人のために攫はれて行く。この攫ひ手は、花婿の伯父であるところに興味がある。この土人の間では、男はすべて母方の伯父の娘を娶る習慣である。そして結婚の際は、いつもその本人の伯父が、主役を承はるのである。結婚式に、花嫁の足を洗ふといふ儀式があるが、この婿の足洗ひ役はまた、嫁の伯父であり、花嫁に首環をかけてやつたり、二人の指を繋ぎ合はせるのもこの伯父である。

この伯父の娘を妻にするといふ制度は、時にはなはだグロテスクな結果を生む。といふのは、伯父の娘がたつた一人しかなく、しかもその娘が、亭主となるべき従弟よりも倍も年齢の長じてゐる場合がある。それでも母方のいとこはいとこである。そこで男が七歳か八歳になると、その自分よりも倍も年の多い女と結婚する。女はその小さい亭主を、まる

で母親が自分の子を背負ふやうに、腰に載せて歩くのである。かういふ場合に、女は男が成熟するまで、男の家庭の人となつて待つてゐるのである。だから、
「これ坊や、そんなに悪戯をしちやいけないよ。」なんて、自分の未來の亭主のお傳りをし
てゐる花嫁さんも、少くないのである。

一妻多夫

一妻多夫の風習は、トーダ種族に行はれてゐる。この一妻多夫は、一人の女性が、數人の兄弟に妻として仕へるので、男兄弟の多い家庭に嫁した女は、當然その兄弟全部を夫とするのである。ところで、女が子を生んだ場合はどうかといふと、それは法律上では正式に結婚式を挙げた夫の子といふことになる。しかし普通一般には、兄弟のうちの長兄が父親であると見られ、また兄弟即ち數人の夫が全部父であるとも見られてゐる。

食べ合ひ、種蒔き

さて、これ等印度諸種族の結婚の儀式はどうかといふと、その多くは、文字通り花嫁花婿の手や指を、糸で結び合はせることをやる。その繫ぐ糸は、薑黄で染めた木綿糸や、絹糸や、或はダルバといふ聖草を用ゐる。或はまた、印度では水を非常に神聖なものとしてゐるので、結ばれる花嫁花婿の手に水をそそぎ、それを偕老の契りの固めにすることもある。バダガ山地民の間では、花嫁の姉または妹が米とミルクをコップに入れたものを出す。花嫁花婿はそのコップの中に、結び合はされた指をつけて、濡らす。それからミルクの中の米を掬ひ上げて、婿は嫁の口に、嫁は婿の口に、各々三度づつ食べさせ合ふのである。テルグ、カナリース、オリヤ地方では、花嫁と花婿の席の間に、衝立またはカーテンを張廻はし、その衝立越しに花嫁は、鹽または米粒を花婿の頭上に投げかける。そして二人の着物の裾を結び合はし、その結び目には、薔薇の葉、米粒、檳榔子、寶貝の殻その他を包みこむ。

印度では結婚式のために、特に小舎を建ててゐるが、この小舎には、ミルク・ポストと稱する、無花果の樹または青竹の棒を建て、これにマンゴーの葉や、種子、銀貨、花嫁花婿の

はめてゐると同じ腕環などを、結びつける。

また印度の結婚式には、壺が重要な什器である。彼等は三億三千万の神々を宿す意味で、三十三個の壺を用ゐる。その壺の大なるものは、周囲十二尺にも達する。これ等の壺に水を張つて、小舎の四隅に積重ね、一個の大なるものは中央に据附け、この中には薑黄水を洗へて、新郎新婦の沐浴用にする。かれ等の壺を尊敬することは、すこぶる厚い。

また印度には、廣く種蒔きの儀式が、結婚式に行はれてゐる。これは九種の穀物の種子を結婚に際して、素焼の瓶の中に蒔くので、これに牛乳や椰子油を供へ、結婚の諸儀式の終了すると共に、河や海に流す。農民の間には、象の土偶を祀り、後これを粉碎するところもある。また佛教の得度式におけるお剃刀の式のやうに、花嫁の額に、理髪師が剃刀を頂かせるところもある。

不貞の女は？

結婚の違反や貞操を破つたものに對する刑罰には、また奇妙な風習がいろいろと行はれ

てゐる。かういふ罪人の刑をきめるのは、すべてその階級の部族會議にかけてきめる。その一つに、女の罪人に對する罰として、前には石臼を抱かせ、背中には素肌の上に猫を背負はせて、街ぢうを曳きづりまはすのがある。これはかなり残酷なもので、石臼の重みでそれを吊るした繩が首筋に食入り、背中の猫はその鋭い爪で背中ぢうをかきむしつて、血みどろになつて了ふ。

南カナラのコラガス種族では、結婚上の罪人があると、河の堤の上に七つの小舎を建て、これにそれぞれ枯草を山と積み上げて火をつける。そしてそのどんく燃えてゐる火の中へ、罪人を押込んで火の上を歩かせるのである。これはマヌの法典に従ひ、七生の罪科をつぐなはせるのである。

コイ種族では、娘が自分より卑しい低い階級の男と通じた時は、その舌を引出して、赤く焼いた黄金の針をのせて焼き淨められ、椰子の葉で作つた七つの縁門をくぐらされる。これもまた七生に因んだもので、この縁門は使用後、すつかり火で焼きはらつてしまふのである。

印度は階級制度の非常に喧ましいところだから、この階級制度に抵觸する者の受ける懲罰は、すこぶる峻厳である。カナラのカピリアン階級では、別階級のものと同じた者は、その階級から放逐される。そしてその女は、死んだものとして女の身につけてゐた裝身具を死屍に擬し、これに對する葬儀を行つた上、焼き捨ててしまふ。またタミールのパリヴァーラム族では、同じ場合に、罪人の肖像人形を造り、その眼球に針を突きさして、部落の外に捨てる。

オリヤ・ラーヴロでは、妻を虐待した亭主を、魚漁用の竹籠に入れ、妻をその上に坐らせてから、二人の頭から五壺の水をぶツかける。これは死者を湯灌する法式で、つまり生きた者を死人扱ひして、侮辱する刑罰である。このほか、わが國古代の探湯に似たので、沸騰した熱湯の底に銀貨を沈め、これを素手で探し取らせる罰もある。

花嫁オン・パレード終

エログロ叢書

グエ
カフエ女給の裏おもて

グエ
花嫁オン・パレード

グエ
艶魔兇盗ざんげ

以上既刊

四六判洋装頗美本各冊讀切
定價各冊七拾五錢、送料各冊六錢

昭和六年五月廿五日 印刷
昭和六年五月廿八日 發行

不許
複製

エログロ叢書

定價金七拾五錢

著者 南 龍 一

發行者 宮 下 軍 平
東京市神田區錢町一ノ十六

印刷者 中 村 倍 吉
東京市神田區今川小路一ノ六

同 所
印刷所 昭 陽 社

發行所

東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番
一 一 松 堂

電話神田一四一〇番

工 羅 口 叢 書 各册分賣

小松直人著

カフエ女給の裏おもて

南龍一著

花嫁オン・パレード

野崎三郎著

艶魔兇盜ざんげ

園義雄譯

アメリカの尖端喜劇集

實田實男著

貞操を蹂躪したらどうなる？

四六判洋装顔美本高尙優美各册讀切 定價各册金七拾五錢・送料各册六錢宛

